

静岡英和学院大学

キリスト教研究年報

第七号

2025 年 3 月

静岡英和学院大学 キリスト教研究会

キリスト教研究年報 第七号

特集：キリスト教と学び

目 次

第7号発行によせて……………	静岡英和学院大学学長 永山ルツ子	
キリスト教系大学における大学生の「宗教性」の意識と 「共感性」に関する検討 ……………	永山ルツ子	1
授業科目「コミュニケーション力」の実践報告……………	柴田 敏	9
キリストの教えに学ぶポジティブ思考と自己成長……………	人間社会学科 金 承子	12
新約聖書における「悪魔」についての一考察……………	人間社会学科 佐々木謙一	21
礼拝を通しての学び— 一年生全員からのアンケートを通して —（研究ノート） ……………	佐々木謙一、山田美代子、金承子	27
インタビュー 永山学長の思い ……………	聞き手 学生企画部 (程一寒・堀川幸喜・宮川大和)	43
2024年度のチャペルとキリスト教行事の報告 ……………		46
2023年度職員研修会におけるレジュメ ……………	大森めぐみ教会主任牧師 関川泰寛	47
執筆要綱……………		55
編集後記……………		56

第7号発行によせて

学 長 永 山 ルツ子

『キリスト教年報』第7号の発行にあたりまして、学長より巻頭のご挨拶を申し上げます。

「愛の実践を伴う信仰こそ大切です」（ガラテヤの信徒への手紙5章6節）

この御言葉は、私たち静岡英和学院大学の建学の精神である「愛と奉仕の精神」に深く根ざしています。愛とは、単なる感情ではなく、具体的な行動によって示されるものです。それは隣人への思いやりや、神から与えられた使命を果たす日々の努力の中に現れます。

このたび、長らく休刊していた『静岡英和学院大学キリスト教年報』を第7号として発行することができましたのは、多くの方々の愛と支えによるものです。この場をお借りして深く感謝申し上げます。

本学の「愛と奉仕の精神」は、単に理念として掲げられるものではなく、教育や日常生活を通じて実践されるべきものです。私たちは、互いに愛し合い、助け合うことを学ぶ中で、神が私たちに求めておられる使命に気づくことができます。そしてその使命を果たすことが、私たち自身を成長させ、社会に希望をもたらす原動力となります。現代社会は、不安や分断、競争が広がる一方で、愛に根ざした関係性や価値観が見失われがちです。このような時代にこそ、キリスト教が示す「愛」が持つ力を再確認し、それをどのように私たちの日常に生かすことができるのかを考えることが求められています。本号では、愛と信仰をテーマに、多角的な視点から執筆された論文等を掲載しています。これらの内容が、読者の皆様にとって、新たな気づきや励ましを与えるものとなれば幸いです。

最後に、これまで『静岡英和学院大学キリスト教年報』を支えてくださった全ての方々に感謝申し上げますとともに、再発行に尽力された宗教主任の佐々木謙一先生をはじめ、ご寄稿、ご協力いただいたすべての方に、心より御礼申し上げます。この刊行が愛をもって歩む私たちの道を照らす小さな光となることを願ってやみません。

キリスト教系大学における大学生の「宗教性」の意識と「共感性」に関する検討 An Examination of College Students' Attitudes toward “Religiosity” and “Empathy” at a Christian University

永 山 ルツ子
Ruth S. Nagayama

本研究は、キリスト教系大学に通う学生たちを対象に、キリスト教の学びを通して「宗教性」の意識と「共感性」について検討することを目的とした。その結果、「宗教性」の「信念」因子と「共感性」の「援助」因子に相関が見られた。本研究の結果より、宗教性の意識と共感性、ひいては本学の建学の精神である「キリスト教的隣人愛」観も測定可能であることが示唆された。また、本学でのキリスト教を根幹とした学びを通して学生たちがどの程度、建学の精神を理解し、意識化できているのかについて、あらためて数量的に検討し可視化することができた。

The purpose of this study was to examine the “religiosity” attitudes and “empathy” among students attending a Christian university through their Christian studies. The results showed a correlation between the “belief” factor of “religiosity” and the “helping” factor of “empathy. The results of this study suggest that awareness of religiosity and empathy, and by extension, the “Christian love of neighbor” view, which is the founding spirit of the University, can also be measured. The study also allowed us to quantitatively examine and visualize the degree to which students understand and become aware of the founding spirit of the university through their Christian-based studies at the university.

Key words: キリスト教 宗教性 共感性 隣人愛

研究の背景と目的

小林（2019）によると、約62%の日本人には「信仰している宗教はない」ことが報告されている。また、安倍晋三元首相が射殺された事件をきっかけに、宗教に対してネガティブな印象や拒否感を持つ人が増えたと聞く。クリーグ（2007）によれば、クリスチャン教員の減少や宗教そのものへの風当たりの強さから、日本におけるキリスト教育への今後を憂える声があるとしている。

日本の私立大学・短大のうち、宗教系の大学・短大は約17.6%を占めており、その中でもキリスト教系の大学が約60.2%近くあるといわれている（齋藤，2013）。キリスト教系

大学の多くは宗教関連科目が必修となっており、授業の中では、平和や愛をテーマとした内容が語られ、カルト宗教やドラッグなどに対して注意喚起するなど、学生の日々の生活に密着した話題を取り上げることが多い。筆者が学長をしている静岡英和学院大学（以下「本学」という）も同様である。

まず本学の歴史を紐解くと、本学の設置主体である学校法人静岡英和学院の創立は、明治20（1887）年、静岡県下最古の女学校「静岡女学校」の開校に遡り、大学としては、その長い歴史と伝統を継承し、平成14（2002）年に開設されたものである。

昭和38（1963）年に学院聖句「心を尽くし、

精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。また、隣人を自分のように愛しなさい。」(「ルカによる福音書」10章27節)が定められた。そして昭和41(1966)年、本学の前身である静岡英和女学院短期大学の設立にあたって建学の精神を「愛と奉仕の実践」とし、短期大学聖句を「愛の実践を伴う信仰こそ大切です。」(「ガラテヤの信徒への手紙」5章6節)と定められた。平成14(2002)年、本学が開設された際にもその精神が継承されて、本学の「建学の精神」となり、大学聖句となった経緯がある。

本学の教育の根幹は、キリスト教に基づく人間教育であり、入学直後に実施される「始業礼拝」に始まり、「スチューデント・リトリート」、「イースター礼拝」、毎週水曜日に行われる「チャペル礼拝」、11月の「創立記念礼拝」、12月の「クリスマス礼拝」、3月の「卒業礼拝」など1年を通じて宗教活動や宗教教育が行われ、カリキュラムにおけるキリスト教関連授業はもちろんのこと、ボランティア活動なども含まれている。

奉仕や援助行動とは、他者が困難な状況に陥っているときに、自らの多少の犠牲を覚悟して助ける行動を指し、社会心理学の分野では「向社会的行動」として研究されている。本学がキリスト教に基づく人間教育を行い、「愛と奉仕の実践」を行う人材を育てることこそ、カナダ・メソジスト教会をルーツに持つキリスト教主義的大学としての役割であると同時に、教育的意義を持つ。そのためにも、本学でのキリスト教を根幹とした学びを通して学生たちがどの程度、建学の精神を理解し、意識化できているのかについて、あらためて定量的に検討し可視化する必要性があり、そのことが本研究の学術的背景となっている。

「宗教性」については、松島(2006)が次のように定義している。「宗教性」とは、「個人がどの程度キリスト教的であるか」を測定する指標であり、すなわち、個人がキリスト教についてどの程度、「信じるのか、感じるのか(宗教的意識)」、「振る舞うのか(宗教的行動)」としており、宗教意識と宗教行動

を包括する枠組みが「宗教性」であるとしている。

松島(2006)は、キリスト教主義学校に所属する中学校・高等学校の生徒について、キリスト教における「宗教性」の発達及び援助行動に関する質問紙を作成し検討した。なお松島(2006)の宗教意識尺度は、「信念」4項目、「体験」9項目、「共同体」6項目、「効果報酬」5項目、「効果責任」5項目の5つの下位尺度から構成されていた。

中高生を対象とした研究の結果、「クリスチャンであること」と「家族がクリスチャンであること」がキリスト教における「宗教性」の高さを示す要因となることが示唆された。また、親がクリスチャンである場合とそうではない場合とで援助行動との関連を検討した結果、必ずしも親がクリスチャンであっても援助行動が高い結果は示されなかった。これらのことから、「教会生活・学校生活およびクリスチャンの友人との関わり」や「教会や学校との関わりから来る安心感の高さ」などが援助行動を取る要因となっていることを示唆していた。

松島(2006)では、宗教性と援助行動について検討していたが、援助行動をはじめとする向社会的行動を動機づけるものの一つに共感性がある(Eisenberg & Miller, 1987)。登張(2003)によると、認知能力や自他意識の発達に伴って、児童期後期には、他者の立場に立って他者の状況をより正確に想像し(役割取得)、他者の体験している苦痛を軽減したいというような他者志向の共感(同情的苦痛)が起こるようになるという指摘している。

登張(2003)は、他者の状況や感情体験に対して、自分も同じように感じ、他者志向の暖かい気持ちを持つ「共感的関心」因子を含めた尺度を作成し、中学生、高校生、大学生の共感性の発達について検討した。その結果、高校生から大学生にかけて感情制御や対人スキルの能力が高まることが示唆された。また、共感性は、人と人が互いに助けあい、支えあい、理解しあって気持ちよく社会生活を送るのに役立つ重要な特性である(登張, 2003)ことから、この尺度を用いることにより、聖

書やチャペルの学びを通して、共感をベースとしたキリスト教的隣人愛観も測定可能と考えられる。

そこで、本研究は、キリスト教系大学に通う学生たちを対象に、キリスト教の学びを通して「宗教性」の意識と「共感性」について検討することを目的とした。

以下、松島（2006）の結果より、クリスチャン学校の生活や学校との関わりから来る安心感の高さなどが援助行動を取る要因となっていることを示唆していたことから、共感性も同様の結果が得られる可能性があることから、以下2点の仮説をあげる。

仮説1 キリスト教の学びを通して、本学の建学の精神である「私は、隣人を自分のように愛し、愛の実践を伴う信仰こそ大切であると思う。」という項目を含む「宗教性」の「信念」因子と「共感性」の「援助」因子に相関が見られるであろう。

仮説2 「宗教性」の全因子において、意識が高い者は（高群）、低い者に比べて（低群）、共感性の「援助」因子で得点が高くなるであろう。

方法

調査参加者 静岡英和学院大学1年生79名、静岡英和学院大学短期大学部1年生45名、計124名が回答した。性別については男性31名、女性84名、回答しないが9名で、平均年齢は19.8歳であった。

材料と手続き 松島（2006）の宗教意識尺度（「信念」5項目、「体験」7項目、「報酬」4項目、「責任」4項目の計20項目）に本学の建学の精神に基づいたキリスト教的隣人愛に関する項目（1項目）を追加したものと、登張（2003）の多次元的共感性尺度（共感的関心因子13項目）を合わせた計33項目の尺度をgoogle formsにて作成した。その際、電子媒体（google forms）によるインフォームド・コンセントを得た。内容としては、回答し送信後に得た実験上の情報は、データとしてのみ取り扱うこと、その際の個人情報の秘密は漏洩しないなどの個人情報の取り扱いに配慮する旨説明した。また、この研究に参

加するか否かは自由意志を尊重すること、一度同意した後でも、いつでも同意を取り消すことができ、一度同意し調査に参加した途中でも、いつでもやめることができること、同意できない場合や途中棄権の場合は、google formsを閉じれば、データは送信されないことを説明した。また、今回の調査参加による成績等による不利益はないことも説明した。

調査については、毎週水曜日の第2時限に「チャペル礼拝」が実施されているホール内で、前期終業礼拝後に実施された。上記google formsのURLをQRコード化したものを印刷し、礼拝終了後に配布した。なお、このチャペル礼拝は1年生必修のキリスト教関連科目と連動している。なお、調査実施前に大学の研究倫理委員会にて研究計画等審査申請書を提出し承認済である。

質問項目については、まず性別、年齢、所属学部・学科について回答するよう指示され、その後、各質問について、自分に当てはまるかどうかを5段階評定で回答するよう指示された。例えば、「私は、信仰を持った生き方こそ、人の真の生き方であると思う」という質問については、「まったく思わない」なら1、「あまり思わない」なら2、「どちらともいえない」なら3、「ときどき思う」なら4、「よく思う」なら5のように、いずれか1つを選択してもらった。回答時間は約10分ほどであった。

結果

1. 尺度構成

(1) **宗教意識尺度** 全21項目について項目－全体得点相関分析を行った。その結果、21項目の全てに有意な相関($r=.62 \sim .92$, $p<.05$)が認められた。また、各下位尺度の内的整合性を検討するために、クロンバックの α 係数を求めた。その結果、0.96と高い値を示したことから、高い信頼性を有することが示された。

(2) **共感性尺度** 全13項目について項目－全体得点相関分析を行った。その結果、13項目の全てに有意な相関($r=.73 \sim .91$,

$p<.05$) が認められた。また、各下位尺度の内的整合性を検討するために、クロンバックの α 係数を求めた。その結果、0.86 と高い値を示したことから、高い信頼性を有することが示された。

実験参加者ごとに共感的関心得点を求め、因子分析 (VARIMAX 回転) した結果、4 つの因子に分かれ、それぞれ援助因子、共感因子、同情因子、無関心因子と命名した (表 2)。

2. 「宗教性」の意識と「共感性」に関する検討

(1) 共感的尺度の各項目における宗教意識尺度の上位群と下位群における違い

まず、宗教意識尺度における下位項目の中で、中央値得点が高かった項目は、(20)「私は、隣人を自分のように愛し、愛の実践を伴う信仰こそ大切であると思う。(中央値 4.00)」と (4)「私は、キリスト教によって、感謝する気持ちを学ぶことができた。(中央値 4.00)」であった。

次に、宗教意識尺度の下位項目(「信念」「体験」「報酬」「責任」)ごとに中央値を求め、独立変数として参加者を上位群と下位群に分

けた。その後、共感的尺度の 4 つの因子(「援助」「共感」「同情」「無関心」)を従属変数として、 t 検定を行った。

その結果、宗教的意識の「信念」因子の上位群と下位群について、共感的関心の「援助」因子 ($t(122)=-3.02, p<.05$)、 「共感」因子 ($t(122)=-2.80, p<.05$)、 「同情」因子 ($t(122)=-2.73, p<.05$) において差が見られた。宗教的意識の「体験」因子の上位群と下位群について、共感的関心の「共感」因子 ($t(122)=-2.03, p<.05$) において差が見られた。「援助」と「同情」因子については、有意な傾向が見られた ($p<.10$)。宗教的意識の「報酬」因子の上位群と下位群について、共感的関心の「援助」因子 ($t(122)=-3.05, p<.05$) において差が見られた。さらに、宗教的意識の「責任」因子の上位群と下位群については、共感的関心の「責任」「援助」「同情」因子についてののみ、有意な傾向が見られただけであった ($p<.10$)。共感的関心の「無関心」因子については、宗教的意識のすべての因子の上位群と下位群間で差は認められなかった。

表1 宗教意識尺度における下位項目ごとの中央値、および上位群と下位群の平均値

	中央値	下位群	上位群
信念	2.40	1.78	3.09
(1) 私は、信仰を持った生き方こそ、人の真の生き方であると思う。	3.00	1.59	3.43
(6) 私は、人間は信仰がなければ幸せにはなれないと思う。	2.00	1.00	2.85
(11) 私は、聖書が人生におけるすべての指針を与えてくれると思う。	2.00	1.00	2.83
(16) 私は、豊かな生活よりも神さまに従う生活のほうが幸福であると思う。	2.00	1.00	2.79
(20) 私は、隣人を自分のように愛し、愛の実践を伴う信仰こそ大切であると思う。*	4.00	2.44	4.49
体験	2.43	1.64	3.49
(2) 私は、自分が常に神さまの前にいるという感覚がある。	2.00	1.00	3.56
(3) 私は、礼拝のとき、神さまがそこにいることを感じる。	2.00	1.00	3.49
(7) 私は、神さまの包み込むようなあたたかさを感じる。	2.00	1.00	3.58
(8) 私は、神さまがいつも自分と共にいて、私を守っていてくれると感じる。	3.00	1.55	4.32
(12) 祈りの中で、またはふだんの生活の重要な場面で、私は神を近くに感じる。	2.50	1.52	3.52
(13) 私は、私の人生の中で神さまの働きを感じる。	3.00	1.45	4.43
(17) 私は、神さまに愛されていると感じている。	3.00	1.52	4.55
報酬	2.75	1.92	3.53
(4) 私は、キリスト教によって、感謝する気持ちを学ぶことができた。	4.00	2.56	5.00
(9) キリスト教は、私の人生に影響を及ぼしている。	3.00	1.50	4.42
(14) 私は、キリスト教によって、悲しみがやわらげられ、救われたことがある。	2.00	1.00	3.45
(18) 私は、聖書のお話を聞くことによって、自分を見つめることができた。	3.00	1.53	4.23
責任	2.75	1.90	3.51
(5) 私たちは、聖書を読まなければならないと思う。	3.00	1.55	4.37
(10) 私たちは、毎週、礼拝に出席しなければならないと思う。	3.00	1.76	4.52
(15) 私たちは、キリスト教を家族や周囲の人々に伝えなければならないと思う。	2.00	1.00	3.49
(19) 私たちは、神さまのために奉仕しなければならないと思う。	2.00	1.00	3.49

*項目(20)については、キリスト教的隣人愛に関する追加項目である。

表2 共感性尺度における因子分析表

共感的関心項目	平均値	第1因子 援助	第2因子 共感	第3因子 同情	第4因子 無関心
(1) 困っている人がいたら助けたい。	3.98	-0.82	0.37	0.04	0.00
(2) 体の不自由な人や高齢者に何かしてあげたいと思う。	4.10	-0.75	0.06	0.49	0.08
(3) 心配のあまりパニックにおそわれている人を見ると何とかしてあげ たくなる。	3.94	-0.74	0.42	0.12	0.00
(4) 落ち込んでいる人がいたら、勇気づけてあげたい。	4.05	-0.75	0.38	0.08	-0.11
(11) 友達がとても幸せな体験をしたことを聞くと、私までうれしくなる。	4.00	-0.52	0.09	0.36	0.07
(6) 他人をいじめている人がいると、腹が立つ。	3.81	-0.24	0.67	0.29	-0.01
(10) いじめられている人を見ると、胸が痛くなる。	4.35	-0.22	0.63	0.42	-0.01
(12) 人から無視されている人のことが心配になる。	4.11	-0.37	0.73	0.19	-0.05
(13) 人が冷たくあしらわれているのを見ると、私は非常に腹が立つ。	4.17	-0.21	0.72	0.12	0.03
(5) 悲しい体験をした人の話を聞くと、つらくなってしまう。	4.27	-0.19	0.42	0.55	-0.06
(7) ニュースで災害にあった人などを見ると、同情してしまう。	4.12	-0.18	0.38	0.83	-0.01
(8) 困っている人を見ても、それほどかわいそうと思わない。	2.02	-0.11	0.01	0.00	0.85
(9) 私は身近な人が悲しんでいても、何も感じないことがある。	1.99	0.08	-0.03	-0.01	0.78
寄与率		22.93	20.68	13.01	10.46

(2) 共感性尺度と宗教意識尺度の相関関係

共感性尺度と宗教意識尺度の下位項目ごとに相関分析を行った結果、宗教的意識尺度の「報酬」因子（「困っている人がいたら助けたい」など）と共感性尺度の「援助」因子（「私は、キリスト教によって、感謝する気持ちを

学ぶことができた」など）項目間のみ中程度の相関($r=0.41$)が見られた。共感性尺度の「無関心」因子については、宗教的意識尺度の全因子とほぼ無相関であった。それ以外の因子については、弱い相関が見られた($r=0.20 \sim 0.34$)。

表3 共感性尺度と宗教意識尺度の各因子項目ごとの相関関係

		共感性尺度（下位因子項目）			
		援助	共感	同情	無関心
宗教的意識 （下位項目）	信念	0.34	0.28	0.34	-0.05
	体験	0.31	0.21	0.26	0.06
	報酬	0.41	0.22	0.25	0.09
	責任	0.33	0.20	0.26	0.01

考察

本研究は、キリスト教系大学に通う学生たちを対象に、キリスト教の学びを通して「宗教性」の意識と「共感性」について検討することを目的とした。

まず、宗教意識尺度における下位項目の中で、中央値得点が高かった項目は、信念因子の「私は、隣人を自分のように愛し、愛の実践を伴う信仰こそ大切であると思う。」と報酬因子の「私は、キリスト教によって、感謝する気持ちを学ぶことができた。」であった。「私は、隣人を自分のように愛し、愛の実践を伴う信仰こそ大切であると思う。」という項目は、松島（2006）の宗教意識尺度の「信念」項目に本学の建学の精神に基づいたキリスト教的隣人愛に関する項目を追加したものであったことから、本学学生は建学の精神への理解が高いと考えられる。

共感性尺度と宗教意識尺度の下位項目ごとに相関分析を行った結果、宗教的意識尺度の報酬因子（「困っている人がいたら助けたい」など）と共感性尺度の援助因子（「私は、キリスト教によって、感謝する気持ちを学ぶことができた」など）項目間のみ中程度の相関が見られた。共感性尺度の「無関心」因子（「困っている人を見ても、それほどかわいそうと思わない」「私は身近な人が悲しんでも、何も感じないことがある」）については、宗教的意識尺度の全因子とほぼ無相関であり、平均得点もそれぞれ、2.02、1.99と低い値であり、宗教的意識と「無関心」因子には関係性は見られなかったことから、本学学生は共感性への無関心はないと言えよう。

松島（2006）の結果より、クリスチャン学校の生活や学校との関わりから来る安心感の高さなどが援助行動を取る要因となっていることを示唆していたことから、共感性も同様な結果が得られた可能性がある。つまり、キリスト教の学びを通して、本学の建学の精神である「私は、隣人を自分のように愛し、愛の実践を伴う信仰こそ大切であると思う。」という項目を含む「宗教性」の「信念」因子と「共感性」の「援助」因子に相関が見られる、という仮説1が支持された。

なお、「援助」以外の「共感」や「同情」因子と宗教性意識間で強い相関が見られなかった理由としては、「援助」因子はどちらかというと「～を助けたい」という援助行動がベースにあった中で、「共感」因子や「同情」因子は「～心配になる」や「～同情する」などの気持ちに重点を置いたものであった。「愛の実践」というキーワードは実際の行為を目標としたものであるため、宗教的意識と「援助」因子間の関連性が高くなったものと思われる。

次に、共感的尺度の「援助」因子における宗教意識尺度の上位群と下位群における違いについては、宗教的意識の「信念」と「報酬」因子の上位群と下位群間に差が見られ、上位群は下位群よりも高い宗教的意識が見られた。また、宗教的意識の「体験」と「責任」因子の上位群と下位群間には有意な傾向が見られ、上位群は下位群よりも宗教的意識が高くなる傾向にあった。つまり、「宗教性」の全因子において、意識が高い者は（高群）、低い者に比べて（低群）、共感性の「援助」因子で得点が高くなるであろうという、仮説2が支持された。

松島（2006）は、青年期の前期から中期にかけて「宗教性」の一部が社会との関わりの中で発達する可能性を示唆し、社会に対する望ましい行動＝援助行動を、彼らが自らの信仰や教義を実践する機会として捉えているとの仮説を唱え、援助行動は、「宗教性」の高さに基づく社会的行動の可能性があると述べている。

松島（2006）では、宗教性の意識と援助行動について検討していたが、援助行動をはじめとする向社会的行動を動機づけるものの一つに共感性がある（Eisenberg & Miller, 1987）。共感性は、人と人が互いに助けあい、支えあい、理解しあって気持ちよく社会生活を送るのに役立つ重要な特性である（登張, 2003）ことから、本研究の結果より、宗教性の意識と共感性、ひいてはキリスト教的隣人愛観も測定可能であることが示唆された。

また、本学でのキリスト教を根幹とした学びを通して学生たちがどの程度、建学の精神

を理解し、意識化できているのかについて、あらためて定量的に検討し可視化することができたこと、また奉仕や援助行動という他者が困難な状況に陥っているときに、自らの多少の犠牲を覚悟して助ける行動「向社会的行動」とキリスト教的隣人愛観が関係していることが示唆され、多くの学生がその点を意識して行動化しようと考えていたことが示唆された。

クリーグ (2007) によれば、クリスチャン教員の減少や宗教そのものへの風当たりの強さから、日本におけるキリスト教育への今後を憂える声があるとしている。しかし、クリーグ (2017) は、「キリスト教教育がこれまで世に訴え、そして実践に移してきた慈愛の精神や奉仕の心、真の自己実現への飽くなき追及は、どんな時代でも共感を呼ぶ価値である」と言及していることから、今後も実践的かつ明示化できるキリスト教的価値観に基づくキリスト教教育の必要性についてさらに検討していく必要があろう。

本研究の調査については、前期終業礼拝後に実施された。本学でのキリスト教を根幹とした学びを通して学生たちがどの程度、建学の精神を理解し、意識化できているのか、については、入学後のキリスト教教育が始まる前と比較するなど経年で分析する必要がある、また大学だけではなく、同一法人の中学・高校生を対象として比較するなど、今後はその点も踏まえて検討課題としたい。

引用文献

- Eisenberg, N., & Miller, P. A. (1987). The relation of empathy to prosocial and related behaviors. *Psychological Bulletin*, **101**, 91-119. (doi.org/10.1037/0033-2909.101.1.91)
- 小林利行 (2019). 日本人の宗教的意識や行動はどう変わったか～ISSP 国際比較調査「宗教」・日本の結果から～. 放送研究と調査, **69**(4), 52-72. (doi.org/10.24634/bunken.69.4_52)
- クリーグ波奈 (2017). キリスト教主義学校の役割とその教育的意義：宗教を通した価

値の社会化の視点から. 東京大学大学院教育学研究科紀要, **56**, 377-387.

松島公望 (2006). キリスト教における「宗教性」の発達および援助行動との関連：キリスト教主義学校生徒を中心にして. 発達心理学研究, **17**(3), 282-292. (doi.org/10.11201/jjdp.17.282)

齋藤崇徳 (2013). 日本における宗教系大学の比較分析：制度的変数を中心として. 東京大学大学院教育学研究科紀要, **53**, 55-65.

登張真稲 (2003). 青年期の共感性の発達：多次元的視点による検討. 発達心理学研究, **14**(2), 136-148. (doi.org/10.11201/jjdp.14.136)

授業科目「コミュニケーション力」の実践報告

柴 田 敏

0

本稿は、筆者の担当授業「コミュニケーション力」における実践報告である。

この科目は、静岡英和学院大学短期大学部現代コミュニケーション学科のカリキュラムの中で「専門教育科目」中の「基本科目」に位置付けられており、選択必修科目である。

著者はこの授業を、2014年度から担当している。途中、2016～2021年度は学長を務めていたため担当を外れていたが、2022年後期から再び担当している。

1

シラバスには次のように記載している

授業の目的と到達目標

コミュニケーションは、人と人とが関係するときに生まれます。人と人とが関係するためには、コミュニケーションが必要です。

紙芝居（かみしばい）や劇（げき）を演じることをとおして、人と関係するためのコミュニケーションの力を付けることができます。人前で発表したり、人と共同作業をすることをとおして、おたがいを認め合うことができます。そして、コミュニケーション力の土台を身につけることができます。

授業内容

紙芝居（かみしばい）、台本（だいほん）のある短い劇などを、実際に演じることをとおして、コミュニケーション力を付けます。授業内では、グループかペアになって練習します。そしてその成果を、人前（ひとまえ）で発表します。発表後には反省をして、改善点（かいぜんてん）を見つけ、さらに練習します。準備、練

習と発表をくり返す授業です。

筆者は演劇の実践者でもなく、演技も演出も素人である。だから、これは演劇の真髄を理解するための授業ではない。演劇の道に進む人を育てる場でもなく、アマチュア演劇を広めていこうというわけでもない。この授業にとって、演劇はいわば「道具」であって、目的や目標ではない。

ではこの授業で目的、目標としているのは何かというと、上に示したとおり、「コミュニケーション力の土台を身につけること」である。

そもそもコミュニケーションの授業と一口に言っても、その内容はさまざまである。「コミュニケーション」そのものを理論的に論ずる授業もある。コミュニケーションの手段としての言語教育もある。第2言語の習得についての授業はもちろん、日本語についての授業もある。母語であっても、新たに学ぶ知識や技法が、コミュニケーションの役にたつということも当然ありうる。手話や点字を教える授業もあるだろう。文章の書き方や、敬語の使い方といった内容の授業もある。

しかし、対面しての、対話によるコミュニケーションの実践ということを考えると、それは知識や技術だけではうまくいかないという現実がある。

たとえば、授業の中でもコミュニケーションはしばしばうまくいかない。教員が学生に意見を求めても、「分かりません」「特にありません」という答えが返ってくるということは、日本の高等学校や大学・短大では、まったく珍しくないことであろう。著者にもそういった経験はたくさんある。これは、教員がコミュニケーションに失敗しているのだと思

う。つまりはコミュニケーションを実践するための場を用意できていないということである。

大学の講義科目は、必ずしもコミュニケーションの実践の場ではないから、大多数の科目については特に問題とはならない。しかし「コミュニケーション力」という名称の授業において、コミュニケーションに失敗しているのでは話にならない。そこで考えるのは、どうすればコミュニケーションが成立するようになるのかということである。

そこで、コミュニケーションを阻害する要因として、どのようなものがあるのかと考えてみると、ストレスではないかと思いつく。授業で何か発言しても、教員から否定的な対応をされるかもしれない。さらには露骨に侮蔑的なコメントをあげられることもありうる。他の学生にどう思われるかも心配だ。このようなストレスを抱えていては、とても意見など言えない。コミュニケーションの実践など、考えられないということになる。

では、受講生にとってストレスなくコミュニケーションがとれる環境とは、どのようなものだろうか。その試みが、演劇を行う授業なのである。

先にも述べたように、これは演劇の真髄を理解するための授業ではない。演劇の道に進む人を育てる場でもなく、アマチュア演劇を広めていこうというわけでもない。だから、演技が下手であるとか、セリフを覚えていないとか、演じる人物の捉え方が不十分だとか、そういうことは一切問題にならない。専門家からは演劇とも見られないものであろうが、とにかく一緒に活動することが大切だと考える。そのため、一緒に活動する人を、否定するのではなく、むしろ一緒に楽しむことが重要である。その中で、活発に意見を出し合ったり、笑いあったりすることの中で、コミュニケーションが実践されていけばいいと、そういう授業なのである。

そのため、担当教員が知識や技能を伝達する授業とは異なり、教員の役割はファシリテーターであるということになる。受講生の間で話し合いや活動が活発になり、受講生が積極的に劇の内容や演出を決めていくことが

求められる。

実はそれより以前に、筆者は「専門演習」の授業の中でも、演劇を行うなどの取り組みをしていた。その場合には衣装や小道具を造ったりして、準備に時間をかけた。また、場面ごとにビデオ撮影をし、最後に全体をつなげてビデオを完成するようにした。しかし「コミュニケーション力」の授業では、先にも述べたように演劇は「道具」であるので、そこまで手間をかけることはしていない。あくまで、コミュニケーションの時間として、受講生の間で話し合いや活動が活発になり、積極的な取り組みがなされることを目指すのである。

そのために教員からは、「楽しく劇をしよう」という呼びかけを繰り返して行っている。

2

では、実際にどのような授業内容で、どのように進行していくのかを報告する。

現在の授業内容は先に示したシラバスにあるようになっているが、それまでの経緯について若干の説明をする。

2014年度に授業を始めた頃は、アイスブレイキングに時間を使っていた。これもストレスを感じることなく、楽しく演劇に取り組めるようにという目的だった。簡単なゲームをしたり、ボールを使った遊びをしたり、この授業の雰囲気というものを作る工夫をした。

そのうちに、紙芝居や絵本を使うことで、リラックスした中で授業を進めるようになった。人間社会学部コミュニティ福祉学科に幼稚園教諭・保育士養成コースがあるので、本学の図書館の紙芝居、絵本の蔵書は充実している。それを利用するのである。

紙芝居、絵本は内容も分かりやすいものが多い。内容が難解であればそれも学生にはストレスとなるので、分かりやすいということもこの場合はプラスになる。

紙芝居や絵本は、はじめは3, 4人でチームを作って読むのであるが、最初はページごと、場面ごとなどに分担して、ここからここまでは〇〇さんというように担当する。そうやってリラックスした雰囲気ができてきた

ら、次にはその紙芝居や絵本を台本にする作業をする。要はチームで協力してセリフと地の文を紙に書き出すのである。そうすれば登場人物（動物）やナレーターに役を割り振って、劇として演じることができるようになる。紙芝居や絵本を読んでいる段階では、体の動きというものが無いのだが、劇にすることで動きを付けられるようになる。この段階で、リラックスしてチーム内での協力ができるようになってくると、各人のアイディアが出てくるようになる。そうなれば、学生が楽しんで取り組むようになるので、コミュニケーションも活発になり、笑いも起きるようになる。

それからはチームの人数を段階的に増やしながら、次の劇、次の劇と演目を変えながら進めていく。紙芝居や絵本を元にした劇から、登場人物も多く、ある程度の長さのある劇になっていく。劇はチーム内で話し合っ選ぶのだが、内容はよく知られた作品が多い。「赤ずきんちゃん」「3匹のゴブタ」「桃太郎」「シンデレラ」などが選ばれている。ネットで台本が手に入る作品もあるので、チームで手分けして台本を作成し、練習をして演じるということをして3回ほど繰り返すのである。

ストレスのない授業の雰囲気ができると、不熱心な学生が出て来るのではないかとすると、それほどでもない。むしろ、とても熱心に取り組む学生たちが出て来るのである。そういった学生が、全体を引っ張るようになれば、授業がだれるということはない。

学生にチームを組んで課題に取り組む形式を取ると、一生懸命に取り組む学生と、そういった学生に任せて消極的な取り組みにとどまる学生に分かれてしまう傾向がある。演劇を取り入れた場合にも、チームをリードする学生と、その指示に従っていく学生というような分かれ方は見られる。ただ、全体にチームの協力体制が希薄になるようなことは起きにくいと思う。それは、学生がチームで劇をする以上、指示に従うにしても、役をこなしていくことは求められるということもある。さらに役を演じることをおもしろい、楽しいと感じていれば、いやいや付き合うという態度にはならないのである。

ただ、授業回によっては、欠席者が多くて、前回リーダーシップを見せた学生がいなかったりして、あまり積極的に進まないこともある。それでも教員としては、あくまで「楽しく劇をしよう」と呼びかけ続けることが必要になる。劇をすることにネガティブな思いを持つことがないように気を付けている。

こうして、授業の進行をなるべく受講生に任せ、教員の介入を減らすことができれば、この授業の到達目標はおおむね達成できたことになる。自己肯定感を持ち、互いに認め合い、チームでの活動が円滑にできていれば、コミュニケーションの土台を身に着けることができたと思わせるからである。

また、シラバスには書いていないが、この授業は留学生にとっても日本語コミュニケーションの練習のよい機会になっていると思う。学期の初めの段階では、チーム分けをするときに留学生が偏らないように配慮しているが、やがて配慮は無用になる。相談して台本や役、場面での動きを作っていくうちに、誰と一緒にしても大体うまくいくようになるのである。

3

最後に、小見のぞみ 2023¹ について言及しておきたい。長年キリスト教教育に取り組んでこられた著者による労作で、だいたい幼稚園、保育園の幼児や小学校の児童を考察対象として書かれたものかと思う。本稿は高等教育の場での授業を取り上げているので、いくらなんでも違いすぎると思われるかもしれない。しかし、「銀行型でなく対話型の教育」、「子ども本位の教育」つまり「学生本位の教育」、「合理的配慮」など、教えられるところが多い著作である。そして、キリスト教による教育こそ、「学生本位の教育」「平和をつくりだす教育」を目指してゆくべきだとする著者の論は、本稿に示した取り組みにも大きな励ましとなっていることを記して、感謝申し上げたい。

¹ 小見のぞみ 2023『非暴力の教育 今こそ、キリスト教教育を！』日本キリスト教団出版局

キリストの教えに学ぶポジティブ思考と自己成長

Learning Positive Thinking and Personal Growth from the Teachings of Christ

金 承 子

1. はじめに

高度情報通信社会¹は、テクノロジーの急速な進化により劇的な変化を遂げている。特に、新型コロナウイルスのパンデミック²を契機として、社会構造や人間関係のあり方に対する価値観が大きく揺さぶられた。リモートワークやオンライン教育が普及し、私たちはIT技術やSNSを通じて世界とつながり続ける一方で、これらが引き起こす問題も顕在化している。情報の過多、フェイクニュースの拡散、そして多様な価値観の相違によって、私たちは「何が正しく、何が間違っているのか」という基準を見失いつつある。このような社会環境の中で、多くの人がアイデンティティ (identity; 個性・主体性・独自性)³

の喪失や無気力感に陥り、引きこもりやうつ病といった精神的な問題に直面している。

こうした時代背景の中で、多くの人が自己啓発の道を模索している。自己啓発本は、一時的な心の支えや新たな視点を与えてくれる。しかし、その多くが本質的な解決策を提供しているとは思えない。筆者もまた、多くの自己啓発書を手に取り、その中から数多くの知恵やヒントを得てきた。しかし、読み進める中で気づいたのは、これらの自己啓発書の多くが聖書を起源とする考え方や価値観に根ざしているのではないかということである。

聖書は、数千年にわたり多くの人々に生きる指針と希望を与え続けてきた。信仰者にとっては日々の生活を支える「日用の糧」としての存在であるが、それは宗教を超えて普遍的な知恵と真理を含んでいる。筆者自身もイエス・キリストを信じる者として聖書を日々の生活に取り入れている。当初は知識の習得や宗教的義務感から読み始めたが、次第にその言葉が生きたメッセージであり、神から与えられたものとして深く心に響くようになった。特に、聖書が示す「ポジティブ思考」という概念は、他の自己啓発書が提唱する手法と共通点を持ちながらも、その深みや普遍性において際立った特質を持っている。

¹ 平成7年(1995年)2月21日、日本政府国土交通省は「高度情報通信社会推進に向けた基本方針」を公表し、以下のように定義した。「高度情報通信社会とは、人間の知的生産活動の所産である情報・知識の自由な創造、流通、共有化を実現し、生活・文化、産業・経済、自然・環境を全体として調和し得る新たな社会経済システムである」また、同年11月には内閣府も類似の定義を示している。

² 厚生労働省公式ホームページ (mhlw.go.jp) を参照して欲しい。令和20年2月25日に政府の「新型コロナウイルス感染症対策本部」が設置され、以降、①ウィズコロナ (with-corona)、②アフターコロナ (after-corona)、③ポストコロナ (post-corona) などの用語が使われていた (閲覧日 2022_09_10)。また、2022年9月8日新型コロナウイルス感染症対策本部が設置され、ウィズコロナに向けた政策の考え方が公表されたことを参照にした。(閲覧日 2022_11_01)。なお、WHO (世界保健機関、World Health Organization) の公式ホームページ (who.int) でも日本の厚生労働省と同じく報道されている (閲覧日 2022_09_10日)。

³ web版 実用日本語表現辞典によれば「アイデンティティ (identity)」とは、「自分は自分であると自覚すること」「連続性のある自己認識を

持つこと」「自分の価値を他者に認められること」などを意味する表現である。わかりやすく言えば、自分が何者であるのかを認識して他者と区別できる状態である。アイデンティティは、日本語では「同一性」と訳されることが多い。たいていの場合は「セルフ・アイデンティティ (自己同一性)」を指す意味で「アイデンティティ」の語が用いられている。https://www.weblio.jp/content/identity, (閲覧日 2024-10-26)

ポジティブ思考は、自己肯定感を高めること、他者への共感を育むこと、そして困難を乗り越えるための希望を見出す力として現代の自己啓発の中心的テーマである。たとえば、筆者が愛読しているデール・カーネギーの著作は、自己啓発の古典として、人生における成功や幸福を実現するための具体的な方法を示してきた。しかしながら、聖書が示すポジティブ思考は、単なる自己改善の技術にとどまらず、人間の存在意義や生きる意味に迫る奥深い洞察を提供している。

本研究では、聖書が示すポジティブ思考が現代の自己啓発に与えた影響を考察し、自己啓発が抱える課題や限界をキリスト教的視点から再評価する。これにより、聖書の教えが高度情報通信社会において、自己成長と癒しのための誰にでも役立つ指針となる可能性と意義を明らかにすることを目的とする。

2. ポジティブ思考の概念と重要性

高度情報通信社会において、個人の幸福や成功を追求する過程で、ポジティブ思考が果たす役割はますます注目を集めている。多くの人々が日常的に直面する困難やストレス、変化の激しい環境において、物事を前向きに捉える能力は心身の健康だけでなく、社会的成功をも左右する重要な要素である。ポジティブ思考は単なる一時的な気分の問題にとどまらず、人間の行動や判断、さらには人生観そのものに深い影響を及ぼす。

この章では、文献研究を中心に据え、ポジティブ思考がどのような心の在り方であるかについて先行研究を基に検討する。同時に、キリスト教をはじめとする宗教的視野を通じて、ポジティブ思考が信仰や自己成長とどのように関連しているかを考察する。このようにさまざまな視点からポジティブ思考の重要性を論じることで、その実践が筆者や人々の人生をどのように豊かにするかを明らかにすることを旨とする。

2.1 ポジティブ思考の定義とその効果

世の中には、ポジティブ思考に関する定義やその効果、実践方法について論じた参考文

献や研究が数多く存在する⁴。その中で、本研究では中村（2010）、山田（2015）、佐藤（2018）の主張を中心に、ポジティブ思考についてまとめることとする。

まず、中村（2010）は、ポジティブ思考を「困難な状況に直面した際にも希望や勇気を持ち続け、物事の良い側面を見出そうとする心の在り方」と定義している（p.45）。この心の在り方は、単なる楽観主義とは異なり、現実を冷静に受け止めながら建設的な方法を模索する姿勢を含んでいる。中村の定義は、ポジティブ思考が単なる「前向きな考え方」ではなく、現実を直視しながらも積極的に未来を切り開く姿勢を含む点を強調している。

一方で、山田（2015）は、ポジティブ思考が個人の心理的な強さに与える影響について述べている。山田によれば、ポジティブ思考は自己効力感や精神的回復力（resilience; レジリエンス）を高め、ストレスや困難に対処する能力を強化するとされている（p.126）。たとえば、失敗や挫折を経験した際にも、その経験から学びを得て次の挑戦に活かす姿勢が、ポジティブ思考の実践例として挙げられる。

さらに、佐藤（2018）は、ポジティブ思考の社会的影響について注目している。佐藤は、ポジティブ思考を持つ人が周囲に与える影響力を指摘し、前向きな態度が良好な人間関係を築く基盤となることを強調している（p.47）。具体的には、リーダーがポジティブ思考を実践することで、チーム全体の士気が向上し、協力体制が強化されるといった事例が挙げられる。このように、ポジティブ思考は個人の幸福感を高めるだけでなく、社会的つながりを強化する役割も果たしている。

⁴ ポジティブ思考に関する定義や効果、実践方法を論じた西洋の著名な著作として、以下のものがある。デール・カーネギー『人を動かす』1936年初版、ナポレオン・ヒル『思考は現実化する』1937年初版、ノーマン・ヴィンセント・ピール『積極思考の力』1952年初版、マーティン・セリグマン『学習性楽観主義』1990年初版、ルイーズ・ヘイ『ライフ・ヒーリング』1984年初版などがある。これらの著作は、ポジティブ思考の概念やその効果、実践方法について深く掘り下げており、自己啓発の分野で広く読まれている。

これらの研究から、ポジティブ思考は個人の内に働きかけるだけでなく、他者や社会との関係性にも多大な影響を及ぼすものである。また、ポジティブ思考の実践は、キリスト教の精神が信仰を持つ個人の心にどのように作用し、ポジティブな心の在り方や自己啓発を促進するかを考えるうえで重要な手がかりとなるものである。本研究では、これらの先行研究を基に、キリスト教の精神が筆者個人のポジティブ思考や自己啓発に与える影響を検討し、具体的な事例を挙げながらその効果を明らかにすることを目指すものである。

2.2 キリスト教との接点

ポジティブ思考は、キリスト教の教えと深い接点を持つ。そのキリスト教の精神は、個人の自己成長や自己啓発において重要な役割をも果たしてきた。聖書に繰り返し示される愛、希望、赦しといった教えは、人々が内面的な変化を遂げ、より良い自己を追求する基盤となっている。中村（2010）は、ポジティブ思考がキリスト教的価値観に根ざした精神性を深める手段となり得ると指摘している（p.58）。たとえば、「試練を耐え忍ぶ人は幸いです。」（ヤコブ 1:12）という聖句は、困難を乗り越える力を内面から引き出すポジティブ思考の重要性を示している。

さらに、山田（2015）は、キリスト教の精神が自己啓発に及ぼす影響について言及している。彼によれば、キリスト教的な自己成長は単なる成功志向ではなく、神との関係を通じた自己の内面の充実を目指すものである（p.130）。この視点は、ポジティブ思考が単なる楽観主義にとどまらず、霊的成長や深い反省を伴うことを示唆している。

D. カーネギー⁵も、著書『道は開ける』の中でポジティブ思考が困難を乗り越える鍵となることを述べている（カーネギー、1948、

p.45）。彼は、困難な状況で「現実を受け入れ、そこから学びを得る」重要性を強調し、問題を単なる障害としてではなく、成長の機会と見なすべきだと主張している。この考え方は、キリスト教の教えにおける「困難を通じて成熟する」という精神⁶と重なっている。

また、佐藤（2018）は、キリスト教の教えに基づくポジティブ思考の実践が、自己啓発において重要な役割を果たすと述べている（p.47）。具体的には、「赦し」の精神が個人の内面的な平安をもたらし、過去の挫折や失敗から立ち直る力を与えることが強調されている。赦しは、自分自身を受け入れると同時に他者を受け入れる態度を促し、自己啓発における鍵となる。

他には、祈りや黙想といった宗教的実践は、ポジティブ思考を支える効果的な手段とされる（中村、2010、p.60）。これらの実践を通じて、信仰者は神への信頼を深めると同時に、自分自身の可能性を信じる力を得る。このように、キリスト教の精神は内面的な強さを育むだけでなく、心の成長を目指した深い自己啓発の道筋を提供している。

これらの研究や考え方を踏まえると、キリスト教の精神は自己成長や自己啓発において欠かせない要素を提供していることがわかる。その特徴は、単なる個人の成功や外面的な達成ではなく、内面的な充実と霊的な成熟を追求する点にある。このことから、キリスト教の精神はポジティブ思考の枠組みを超え、個人の全体的な成長を支える重要な基盤となっている。

⁵ デール・カーネギーの自己啓発の古典として、特に有名なものに次の2冊が挙げられる。『人を動かす』は、人間関係の原則を説き、他者との良好な関係を築くための具体的な方法を提供している。また、『道は開ける』は、人生の悩みや不安に対処するための具体的な方法を示し、前向きな生き方を提案している。

⁶ たとえば、新約聖書の「ヤコブの手紙 1:2-4」では、試練が忍耐を生み出し、その結果、人間的に成熟し、欠けたところのない人間となると述べられている。同様に、「ローマの信徒への手紙 5:3-4」でも、苦難が忍耐を生み、忍耐が練達を生み、練達が希望を生み出すと語られている。これらの聖書箇所は、キリスト教の教えが試練や困難を単なる苦痛ではなく、人格や信仰を深めるための重要なプロセスと捉えていることを示しており、「困難を通じて成熟する」という精神と一致する根拠となっている。

3. キリスト教の精神と自己成長、自己啓発との接点

本章では、筆者が長年愛読してきた聖書と2冊の本を中心に論じる。それは、ニール・ドナルド・ウォルシュの『神との対話』と、キリストを信じる信仰者であり『氷点』の作家である三浦綾子の著作である。筆者はこれらの作品から深い感銘を受け、北海道の地で三浦の温もりを感じる旅に出るほど、そのメッセージに心を動かされた。本章では、これらの本を参考にしながら、キリスト教がどのように個人の自己成長と自己啓発に寄与するのかを考察していく。

キリスト教の精神は、個人の自己成長や自己啓発において重要な役割を果たしてきた。それは単なる信仰の枠を超え、人生全体を通じた自己成長の可能性を信じる者に示すものである。ウォルシュの『神との対話』(1995年, pp.45-67) や三浦の『氷点』(1965年, pp.127-129) を挙げる。この作品では、苦難を通じて自己の在り方を見直し、成長する登場人物の姿が描かれている。特に、登場人物が困難な人間関係を乗り越える中で、自己理解を深め、他者への共感を育む様子は、自己成長のプロセスを象徴している。ドラマとして展開される『氷点』の物語を追う中で、筆者自身もその辛さに共感し、同時に乗り越える姿に自身を重ねた経験がある。

3-1. 自己成長の定義その重要性

自己成長とは、人生の中で直面する経験を通じて精神的、知的、そして人格的に成熟していく過程を指す。この概念を明確にするために、以下の文献を参照する。

ウォルシュの『神との対話』(1995年, pp.50-52) では、神との対話を通じて自己理解を深め、人生の目的を見出す重要性が説かれている。ウォルシュは、自己成長を「外的な成功よりも内面的な満足感を重視するプロセス」として描いており、これはキリスト教的な価値観と深く共鳴するものである。

一方、日本の文献として三浦の『氷点』(1965年, pp.127-129) を挙げる。この作品では、苦難を通じて自己の在り方を見直し、成長す

る登場人物の姿が描かれている。特に、登場人物が困難な人間関係を乗り越える中で、自己理解を深め、他者への共感を育む様子は、自己成長のプロセスを象徴している。

このように自己成長は、静かに自分と向き合い、自分の行動や思考を優しく見つめ直すことで、それが他者や自分自身にどのような影響を与えているかを理解することから始まる。これらの文献が示すように、成長は単なるスキルの習得に留まらず、価値観や信念を見直し、人生の目標を再構築する包括的なプロセスである。

3-2. キリスト教が自己成長に与える影響

キリスト教では、人間が「神は御自分にかたどって人を創造された。」⁷ (創世記 1:27) であることが、人間の本質や生き方を支える土台となる。この教えは、人間が神の愛や真理を反映する存在として成長し、より良い方向へと進む使命を与えていることを示している。

この教えは、著名な文献や神学者によっても支持されている。例えば、アウグスティヌス⁸の『告白録』(397年頃, 第1巻, 第1章) では、人間の心が神を求めてやまず、神の愛に向かう成長が不可欠であると説かれている。また、C.S. ルイスの『キリスト教の精髓』(1952年, pp.91-92) では、信仰が人間を神の似姿へと近づける霊的な旅であると述べられている。これらの文献が示すように、信仰を持つことで、個人は自己成長を神の計画の一部と捉え、より高い目標に向かって進むことができる。

祈りや瞑想は、内面的な成長を促す重要な実践である。祈りを通じて神の声を聞き、自分の心を探ることで、静かに自分と向き合い、

⁷ 聖書協会共同訳共同訳聖書実行委員会 [訳] (2016) 聖書：新共同訳 旧約聖書続編つき、日本聖書協会。(創世記 1:27、ローマ 5:3-4、マルコ 12:31、コリント第一 13:4、マタイ 5:9、テサロニケ 5:18)

⁸ トマス・アウグスティヌスの思想については、山本芳久著『トマス・アキナス：理性と神秘』(岩波書店, 2017) の第3章 (pp.90-120) を参照してください。

優しく見つめ直すことができる。この行為は自己理解を深め、日常生活においてより良い選択を可能にし、人格的な成熟を助ける。この行為は自己理解を深め、日常生活においてより良い選択を可能にし、人格的な成熟を助ける。

ウォルシュの『神との対話』(1995年, pp.55-60)は、祈りが自己成長をどのように促すかについて詳細に述べており、三浦の『水点』(1965年, pp.130-133)も、人間関係の中での自己理解の重要性を描写している。これらの作品は、筆者の感情を深く揺さぶり、自己成長の指針として非常に貴重な存在となっている。

3-3. 試練が自己成長にもたらすもの

キリスト教の教えでは、試練は単なる苦難ではなく、自己成長と信仰の深化の機会として捉えられる。『ローマの信徒への手紙』には「苦難は忍耐を、忍耐は発達を、発達は希望を生む」(ローマ 5:3-4)と記されている。この言葉は、試練を通じて人間が成長する可能性を象徴している。

例えば、失業や病気といった試練は一見すると苦しいだけの経験に思えるが、これらの状況を通じて謙虚さや忍耐力を学ぶことができる。また、他者と協力し、支え合う経験は共感力を育み、自己中心的な考え方を超えた成長をもたらす。

三浦の『水点』(1965年, pp.133-135)には、試練を乗り越えた人々が他者を理解し、助け合う姿が描かれている。これは、キリスト教的な試練の捉え方と自己成長の結びつきを具体的に示していると言える。

試練を通じた自己成長は、単に個人の成熟だけでなく、神の意志に近づくプロセスとしても重要である。これにより、信者は心の平安とより深い信仰を得ることができる。

したがって、キリスト教は自己成長を信仰の実践や試練を通じて育む道を示している。自己成長とは単なる内面的な変革に留まらず、神の愛や真理を体現する存在へと近づくプロセスである。ウォルシュの『神との対話』(1995年, pp.45-67)や三浦の『水点』(1965

年, pp.123-135)に描かれるように、祈り、反省、試練を通じて人間は内面的な平安と深い信仰を得ることができる。

筆者自身も、人間関係や自己との闘いに直面し、苦しむときがある。そんなとき、ウォルシュの『神との対話』に描かれる神との関係の深まりや、三浦が病や困難を乗り越えた経験が、筆者にとって大きな支えとなった。これらの物語や実体験は、試練の中でも信仰と祈りによって希望を見出し、前向きに歩む力を与えてくれる。

4. 実践としてのポジティブ思考と自己成長

ポジティブ思考と自己成長は、理論や概念を超え、日々の実践を通じてこそ本質的な成果を得ることができる。キリスト教における信仰の教えは、ポジティブ思考を具体的な行動に結びつけるための明確な指針を与えている。祈りや感謝の習慣、聖書の言葉を日常に取り入れることなど、信仰に基づく具体的な実践を行うことで、内面的な成熟と人生全般の充実がもたらされる。

4-1. ポジティブ思考の実践方法

ポジティブ思考を生活に定着させるためには、具体的な行動を日々の習慣として取り入れることが必要である。その中でも、祈り、感謝の習慣、そして前向きな言葉の使用は、ポジティブ思考を実践する上で特に重要な要素である。

祈りは、ポジティブ思考の土台を築く行為である。祈りを通じて、神との対話が行われ、自分自身の気持ちを整理し、平安を得ることができる。特に、祈りの中で感謝を表現することは、日常の中にある恵みや喜びを再認識し、それを深く心に刻む助けとなる。一日の終わりに「今日感謝すべきこと」を祈りの中で振り返る習慣を持つと、小さな喜びに気づく能力が高まり、全体的に前向きな心の在り方が育まれる。このような祈りの習慣は、困難な状況においても感謝の視点を失わないための大きな支えとなる。

感謝の習慣を持つことも、ポジティブ思考を実践する上で欠かせない。感謝の気持ちは、

日常生活におけるポジティブな面を見つける能力を高める。例えば、毎日感謝すべきことをノートに記録する「感謝日記」をつけることで、日常の中で当たり前と感じていた事柄が実は多くの恵みであることに気づくことができる。

筆者の場合、できる限り毎日、その都度感謝の気持ちが生まれるときにノートに記録する習慣を続けている。一時、オプラ・ウィンフリー⁹の「感謝日記」に刺激されてこの実践を始めたが、その習慣は現在も続けている。この取り組みを通じて、自分の豊かさを心から感じるようになり、日常生活の中で感謝すべきことに気づく機会が増えた。この実践は、筆者にとってポジティブな視点を持ち続けるための大切な方法となっている。

さらに、前向きな言葉を使用することも、ポジティブ思考を深めるための重要な手段である。筆者は人を褒めることが好きであり、特に弱い立場にいる人の良いところを伝えることを心がけている。このような積極的な言葉の使用は、相手に自信や希望を与え、ポジティブな刺激をもたらす。

肯定的な自己対話、つまり自分自身に前向きな言葉をかける習慣を持つことは、自信を高め、困難な状況にも柔軟に対応する力を養う。また、他者に対しても励ましや感謝の言葉を積極的に使うことで、ポジティブな環境を作り出すことができる。例えば、日常会話の中で「ありがとう」や「素晴らしいね」といった言葉を意識的に使うことは、自分と相手の両方に前向きな影響をもたらす。

このような実践を通じて、ポジティブ思考

が自然と身につく、自己成長のプロセスがより効果的に進むのである。

4-2. 信仰と自己成長を結びつける生活の工夫

キリスト教の教えを日常生活に取り入れることは、ポジティブ思考と自己成長を促進する上で極めて効果的である。そのためには、信仰の教えを単なる知識としてとどめるのではなく、日々の生活の中で具体的な行動に結びつける工夫が必要である。

聖書には、希望や感謝、忍耐を教える言葉が数多く記されており、それらを生活の中に意識的に取り入れることが、信仰と自己成長を結びつける鍵となる。例えば、「どんなことにも感謝しなさい」(テサロニケ 5:18)や「明日のことまで思い悩むな」(マタイ 6:34)といった言葉は、日常生活の中で直面する困難や不安を前向きに捉える助けとなる。

これらの言葉をメモやカードに書き留め、家や職場の目につく場所に置くことで、ふとした瞬間に思い出し、自分の考えや行動を見直すきっかけとすることができる。このような小さな工夫を積み重ねることで、聖書の教えが自分自身の一部となり、日々の選択に影響を与えるようになる。

また、祈りや瞑想の時間を持つことも信仰と自己成長を結びつける重要な実践である。祈りは、神との対話を通じて自分の心を静め、内面に向き合う時間を提供する。祈りの中で自分の願いや感謝を表すことは、日常生活における神の導きを再確認し、感謝や希望を深める機会となる。また、一日の終わりに瞑想を行い、その日あった出来事を振り返ることで、自分の行動や考え方を見直すことができる。このような反省の習慣は、日々の中で見過ごしがちな小さな喜びや恵みに気づき、それを感謝の形で受け止める力を養う。

さらに、他者への奉仕は、キリスト教の教えを実際の行動に移す場であり、信仰を通じた自己成長の重要な要素である。困難な状況にある人々を助ける行動は、自分の持つ恵みに気づき、感謝の心を深めるきっかけとなる。また、奉仕を通じて他者と関わることで、自分の視野が広がり、共感や思いやりといった

⁹ 経済雑誌のフォーブスで2016年に「アメリカで最も成功した女性」で2位に選ばれた俳優、慈善家のオプラ・ウィンフリー氏は、10年以上感謝の日記を書き続けているのだそうです。彼女にとって、感謝とは——「人生に何が起きてても感謝の心を忘れずにいることを学んだ時、チャンスや人間関係、そしてお金までもが、自分のもとに流れてきた」“米国で最も成功した女性ランキングGAP創業者、資産2700億円で3位” | Forbes JAPAN 公式サイト (フォーブス ジャパン) 2016.06.02 https://forbesjapan.com/articles/detail/12357?utm_source=chatgpt.com (閲覧日 2024-09-25)。

人格的な成長が促される。

例えば、地域の奉仕活動に参加することで、他者の視点や価値観を学び、それが自分の生活や信仰のあり方に新たな洞察をもたらすことがある。

これらの実践を通じて、信仰は単なる精神的な支えにとどまらず、日常生活の中で具体的な変化をもたらす力となる。祈りや感謝の習慣、他者への奉仕を通じて、信仰者は自分自身を見つめ直し、神との関係を深めると同時に、心の成長と自己精進を実現することができる。このように、キリスト教の教えを生活になじませる工夫は、信仰と自己成長を結びつけ、より充実した人生を築くための重要な土台を提供するのである。

5. キリスト教の教えが社会に与える影響

キリスト教は、個人の信仰にとどまらず、社会全体に対しても多大な影響を与えてきた。聖書の教えに基づく価値観や行動原則は、家庭や職場、地域社会における人間関係のあり方を深く形作っている。また、高度情報通信社会においては、分断や対立が広がる中で、キリスト教的な共感や平和のメッセージが重要な意味を持つ。本章では、キリスト教の教えが個人を通じて社会全体に与える影響を考察するとともに、その現代的な意義について論じる。

5-1. 個人から社会へ

キリスト教の教えに基づくポジティブな生き方は、まず個人に内面的な変化をもたらし、その影響が周囲の人々に波及していく。聖書の教えに従い、「隣人を自分のように愛しなさい」(マルコ 12:31)という姿勢を日常生活で実践することは、家庭や職場、地域社会において信頼と協力を築く重要な基盤となる。

家庭において、キリスト教的な価値観は家族間の絆を深める。例えば、「愛は忍耐強い。愛は情け深い」(コリント第一 13:4)という教えを実践することで、家族のメンバー同士が互いに理解し合い、困難な時期にも支え合う関係を築くことができる。このような家庭環境は、子どもたちが共感や寛容の価値を学

び、将来的に社会の中でこれを実践する基盤を作る。

職場では、キリスト教的な価値観に基づく行動が、同僚や上司との信頼関係を築き、健全な職場環境を生み出す。例えば、「どんなことにも感謝しなさい」(テサロニケ 5:18)という教えを心に留め、日々の仕事や周囲の人々に感謝を表すことで、協力的で前向きな職場文化が醸成される。また、リーダーシップにおいても、他者を尊重し、共感を持って接する姿勢が、部下の成長を促し、チーム全体の成果を向上させる。

地域社会においても、キリスト教の教えに基づく奉仕活動や慈善事業は重要な役割を果たしている。キリスト教徒が「困っている人を助ける」という教えを実践することで、地域の中に協力と支援のネットワークが形成される。例えば、教会が運営するフードバンクやボランティア活動は、地域社会の弱者を支援するだけでなく、地域全体に連帯感を育む効果がある。

5-2. 高度情報通信社会における意義

高度情報通信社会では、グローバル化や技術の進展により人々のつながりが拡大する一方で、分断や対立が深刻な課題となっている。このような状況の中で、キリスト教の教えが持つ平和や共感のメッセージは、社会的な調和を促進する上で大きな意義を持つ。

例えば、「平和を実現する人々は、幸いである」(マタイ 5:9)という教えは、争いを解決し、平和を築くための指針を与えるものである。この教えを実践することで、個人間や集団間の対立を乗り越え、対話と協力を促進することが可能になる。キリスト教徒がこのような姿勢を取ることで、分断が広がる社会の中に共感の輪を広げる役割を果たす。

また、高度情報通信社会において孤立感を抱える人々に対して、キリスト教は精神的な支えと希望を提供する。特に、「わたしの目にあなたは価高く、貴くわたしはあなたを愛し」(イザヤ 43:4)という教えは、自己価値を見失いがちな人々に勇気と自信を与える。このようなメッセージは、高度情報通信社会

の中で自己肯定感を高め、より健康的で前向きな生き方を支える力となる。

さらに、キリスト教的な慈善活動や社会的支援は、困窮する人々や社会的弱者に対して具体的な助けを提供するだけでなく、社会全体に対するポジティブな影響を広げる。例えば、教会や宗教団体による支援プログラムは、社会的なつながりを広げることに貢献し、分断を緩和する役割を果たしている。

従って、キリスト教の教えは、個人の内面的な成長を促すだけでなく、それを通じて家庭、職場、地域社会、さらには社会全体に良い影響を与える可能性を持っている。さらに、高度情報通信社会が抱える分断や対立の課題に対して、平和と共感をもたらす解決策を提供している。これらの教えを実践することで、個人の幸福だけでなく、社会全体の調和と繁栄を築くことができるのである。

6. おわりに

本研究では、キリスト教の精神とポジティブ思考が現代社会において果たす役割について考察してきた。高度情報通信社会は、新しい可能性を広げる一方で、孤立感や分断、不安など、私たちが直面する課題を増大させている。このような時代において、キリスト教が示す愛や希望、赦しのメッセージが、どれほど大きな力を持つかを改めて実感した。

キリスト教の精神は、私たち一人ひとりの内面に働きかけ、自己成長を促すだけでなく、他者との関係を豊かにする力を持っている。たとえば、祈りや感謝の実践を通じて、日常生活の中で喜びや平安を見出すことができる。また、試練を乗り越える経験は、私たちに忍耐力や謙虚さを教え、困難な状況に直面している他者に対する共感を育むきっかけとなる。このようなプロセスは、私たち自身を変えるだけでなく、周囲の人々にも前向きな影響を与えることができる。

その上、キリスト教の教えは、家庭や職場、地域社会といった身近な場面から、社会全体にまで広く影響を及ぼしている。本学学院の聖句でもある「隣人を自分のように愛しなさい」(ルカ 10:27) という教えは、個々の人間

関係を深めると同時に、隔たりが広がる現代社会において共感と平和を広げるための大切な指針を示している。また、教会や信仰共同体が行う奉仕活動や慈善事業は、助けを必要としている人々への具体的な支援を提供するだけでなく、社会全体に連帯感や相互支援の文化を育む役割を果たしている。

本研究を通じて、キリスト教が示すポジティブ思考が、単なる楽観主義や個人の成功を目指す自己改善ではないことが分かった。それは、人間の深い部分に働きかけ、人生の意味や目的を探る手助けをするものであり、神とのつながりを軸に据えた生き方を提案するものである。このような生き方は、困難に直面しても希望を失わず、自己成長を続ける力を与えてくれる。

特に、高度情報通信社会における課題を考えると、キリスト教の精神が果たす役割はますます重要であると言える。技術の進展によって世界中の人々がつながる一方で、孤立感や対立が深まるという現実の中で、キリスト教の教えは人々に希望と癒しを提供する。その教えは、個人の枠を超え、社会全体におけるつながりを深め、共感と調和を育む力となる。

本研究が示すように、キリスト教の精神に根ざしたポジティブ思考は、私たちの内面的な成熟や社会的なつながりを深める鍵となる。祈りや感謝、他者への奉仕を通じて得られる経験は、私たちがより良い未来を築くための確かな基盤となるだろう。これからも、このような生き方が多くの人々に共有され、さらなる平和と共感の輪が広がることを願ってやまない。

参考文献・参考サイト

- アンドリュー・カーネギー. カーネギー自伝 (*How to Win Friends and Influence People*). 坂西志保訳. 中央公論新社, 2021, 424p.
- アントニオ・R・ダマシオ. 無意識の脳ー自己意識の脳ー身体と情動と感情の神秘 (*Damasio The Feeling of What Happens*). 田中三彦訳. 講談社, 2003, pp.33-58.
- アーサー・ベル. 自己を伸ばすーカーネギー・

- トレーニング (*Enrich Your Life Dale Carnegie Way*). 香山晶訳. 創元社, 2020, pp.110-125.
- L.W. カントリーマン. ヨハネ福音書の神秘主義. 宇都宮秀和訳. 教文館, 1994, pp.85-102.
- 共同訳聖書実行委員会 [訳] 聖書: 新共同訳旧約聖書続編つき. 日本聖書協会, 2016, (創世記 1:27, ローマ 5:3-4, マルコ 12:31, コリント第一 13:4, マタイ 5:9, テサロニケ 5:18) 木塚隆志・中井章子. キリスト教神秘主義著作集 第12巻 - 十六世紀の神秘思想. 南原和子訳. 教文館, 2014, pp.112-130.
- 高度情報通信社会推進本部. “高度情報通信社会推進に向けた基本方針”. 国土交通省. 1995-02-21.
<https://www.mlit.go.jp/road/ITS/j.html/ITSinJapan/mril.html> (参 照 2024-09-12).
- 高度情報通信社会小委員会. “高度情報通信社会小委員会 報告”. 内閣府. 1995-11.
<https://www5.cao.go.jp/j-j/keikaku/k-johop-j-j.html> (参照 2024-09-12).
- 佐藤一郎. “第2章 ポジティブ思考とレジリエンスの関連性”. レジリエンスとポジティブ思考. 大阪, 心理学出版, 2018, pp.34-56.
- 谷隆一郎・熊田陽一郎 (編) キリスト教神秘主義著作集 第1巻 - ギリシャ教父の神秘主義. 教文館, 1992, pp.45-60.
- デール・カーネギー. 道は開ける (*How to Stop Worrying and Start Living*) 創元社, 1948, pp.80-95.
- 中村太郎. “第3章 ポジティブ思考の効果” ポジティブ心理学入門. 東京, 日本心理学会. 2010, pp.45-67.
- ニール・ドナルド・ウォルシュ. 神との対話 (*Conversations with God*). 吉田利子訳. サンマーク出版, 1997, pp.45-67.
- 三浦綾子. 氷点. 朝日新聞社, 1965, pp.127-135.
- _____ 道ありき新潮文庫, 1984, pp.45-89.
- _____ 続 氷点. 朝日新聞社, 1997, pp.150-160.
- 三宅章介. “企業内教育としての『自己啓発』の類型化に関する一考察”. 産業教育学研究. 1999, Vol.29/No1, pp.38-39.
- 西田公昭. マインド・コントロールとは何か. 紀伊國屋書店, 1995, pp.10-25.
- 山田花子. “ポジティブ思考がストレス対処に及ぼす影響”. 心理学研究. 2015, Vol.86/No.2, 123-135. p.126.
- 山本芳久. トマス・アクィナス 理性と神秘. 岩波書店, 2017, pp.90-120.
- 読売新聞社. 幸福を求めて 自己啓発本からポジティブ心理学まで. 読売新聞社, 2024, p.3-15.

新約聖書における「悪魔」についての一考察 A Study of the 'Devil' in the New Testament.

佐々木 謙 一

はじめに

筆者の研究テーマは、日本におけるキリスト教「悪魔祓い」についての考察である。『日本の東北地方におけるキリスト教「悪魔祓い」についての宗教学的考察』において、日本のキリスト教における「悪魔祓い」について調査し、その結果、東北地方の613のキリスト教会の中に26が「悪魔祓い」を行っていることを明らかにした。また、それを行う聖職者の話を分析することによって、その特徴と実態と構造を考察した。¹

このように、考察の結果、それまで明らかにされてこなかった、日本におけるキリスト教「悪魔祓い」の特徴と実態と構造を明らかにしたのであるが、キリスト教における「悪魔」や「悪霊」が、どのように考えられてきたのかを明らかにするまでには至らなかった。そこで、これらのことを整理することは、今後、日本のキリスト教「悪魔祓い」の研究を続けていく上で、非常に重要であると考えられる。

そして、このような課題を解決するために、今回の論文において、キリスト教にとって最も重要な書物である新約聖書の中に描かれている「悪魔」の概念を考察する。

キリスト教の「悪魔」の概念は、古代ヘブライ人たちによって、また、それ以前の様々な文化や伝統に影響を受けることによって、形成されて来たと考えられる。キリスト教の歴史の中で形成され、発展してきた「悪魔」の概念は、キリスト教にとって無くてはならないものとなっていく。とくに、キリスト教

が内外の敵に対して確立した神学の中で、「悪魔」の存在は、重要な役割を担っていく。そして、「悪魔」は、そのイメージや姿を時代を追うごとに変化させていった。

キリスト教が最も重要としている正典である新約聖書の中に描かれている「悪魔」を考察することは、今後、キリスト教の「悪魔」を考察する上で、必要不可欠であると考えている。

また、新約聖書の「悪魔」に焦点を当て、「悪魔」が神による人類の救済において必要であるという理論について考察したい。

本論文では、これらのことを明らかにするために、「悪魔」学の第一人者であるジェフリー・バートン・ラッセル (Jeffrey Burton Russell)²、ジョルジュ・ミノワ (Georges Minois)³の理論を中心に、新約聖書における「悪魔」の概念について整理する。

第1章 新約聖書における「悪魔」

新約聖書は、ヘレニズム期にユダヤ教の環境を背景として書かれた。そのため、新約聖書にはヘレニズムとユダヤ教の影響がみられる。とくに、その思想は、黙示文学の伝統から影響を受けた。それは、ヘブライ正典（旧約聖書）において「悪魔」がほとんど描かれていないのに対して、新約聖書において「悪魔」が中心的な存在として描かれていることから知ることができる。

当時、正統派ユダヤ教は、「悪魔」を重要

¹ 佐々木謙一 (2023) 『日本の東北地方におけるキリスト教「悪魔祓い」についての宗教学的考察』 (博士論文, 東北大学)。

² 1934年アメリカ合衆国カリフォルニア州生まれ。歴史学博士。専門分野はキリスト教史。1998年引退。

³ 1946年パリ南方エソンヌ県アティ＝モン市生まれ。歴史学教授。

に考えていなかった。そのためにヘブライ正典（旧約聖書）には「悪魔」はほとんど描かれていない。一方、正統派から外されたユダヤ教内の過激な小集団は、「悪魔」を重要と考え、黙示文学の中にその存在を中心的に描いている。

そして、新約聖書において「悪魔」が重要な存在として描かれていることから、初期キリスト教の共同体が、ユダヤ教の過激な小集団に影響を受けていたということがわかる。ミノワは以下のように述べている。

キリスト教のごく初期の諸共同体が、この前に述べたようなユダヤ教の小集団と重なるということは、もはや火を見るよりも明らかである。悪魔は旧約聖書の正典にはほとんど姿を現さないが、新約聖書で突然威勢よく現れることがその紛れもない証拠である。両者の調子において思いもよらぬ急激な変化を見ることができる。今までは、ほとんど目立たない脇役であった登場人物が、突然舞台の全面に躍り出てきたのである。⁴（以上、筆者訳）

このように、新約聖書は、黙示文学における「悪魔」の概念の伝統を引継ぎ、そして、それを变えることなく書かれたのである⁵。

では、「悪魔」はそのような新約聖書の中でどのように描かれているのであろうか。ここでは、新約聖書が考える「悪魔」について論じる。

初期キリスト教の共同体は、自分たちの正統性を主張するために敵対者を必要とした。それが「悪魔」であり、その重要性は、新約聖書において「悪魔」が多く記されていることから知ることが出来る。ミノワは以下のように述べている。

新約聖書において、悪魔が登場した回数

は驚くことに188回に及んでいる。「デーモン」として62回、「サタン」として36回、「悪魔」として33回、「獣」として37回、「ドラゴン」として13回、「ベルゼブル」として7回）。⁶（以上、筆者訳）

また、新約聖書における「悪魔」は、その内容から、その時代の民衆に想像する力を与えた。なぜなら、新約聖書の「悪魔」は、イエスの弟子である12人の使徒たちやパウロによって語られているからである。当初は、口伝えであった福音書は、聴く者に興味を持たせた。そして、その物語の中で、12人の使徒たちやパウロによって語られる「悪魔」は、民衆にとって生々しく、まさに、イエスの敵として、想像されるものとして語られた。ポール・ケーラス（Paul Carus）⁷は以下のように述べている。

悪魔は、キリストの時代の人々の想像力の中で重要な役割を果たしていた。サタンは、共観福音書の中で、律法学者やイスラエルの人々によって、また、十二使徒たち特に聖パウロによって、そして、聖ヨハネの啓示では非常に頻繁に、繰り返し言及されている。⁸（以上、筆者訳）

また、新約聖書における「悪魔」は呼称で呼ばれている。これはヘブライ聖典（旧約聖書）から引き継がれた概念である。そしてその新約聖書に示されている「悪魔」の呼称はいくつか考えられている。ケーラスは以下のように述べている。

サタン、ベルゼブブ、デヴィル（後者は『シラクの子イエス』に初めて登場する）という古い呼び名に加え、新約聖書では、「この世の支配者」、「大いなる竜」、「古

⁶ Minois, G. *Le diable*, op.cit, p.23.

⁷ 1852年生まれ。ドイツ系アメリカ人の作家、編集者、比較宗教学者、哲学者。1919年没。

⁸ Carus, P. (1899) *The History of The Devil And The Idea of Evil*. The Open Court Publishing Co. (Chicago, US), p.157.

⁴ Minois, G. (2000) “*Le diable*, “*Que sais-je ?*, P.U.F. (Paris), p.23.

⁵ Russell, J. (1977) *The Devil*. Cornell University Press. (NY, US), p.221.

い蛇」、「悪魔たちの支配者」、「空の天使の支配者」、「不信仰の子らに働く霊」、「反キリスト」などと呼ばれている。⁹（以上、筆者訳）

このように、新約聖書の中に描かれる回数や使徒たちによって言及されていることから、初期のキリスト教が「悪魔」を重要に考えていたことがわかる。また、新約聖書に記されている内容を分析することによって、初期のキリスト教が「悪魔」をどのように考えていたかを知ることができる。

新約聖書は、イエス・キリストが「悪魔」と、また、その「悪魔」が支配している国と、闘っているということを示している。そして、神はその「悪魔」に勝っている。このように新約聖書は神と「悪魔」との闘いについて書かれているが、何よりも「悪魔」の存在を中心に考えている。

また、新約聖書の中心的概念は、キリストによる人間の救済である。この世は「悪魔」の支配によって苦難や苦痛に満ちている。しかし、その「悪魔」の力を超えた大きな力が存在する。そして、その大きな力こそ、キリストによる救済である。つまり、キリストによる救済とは、「悪魔」の権力また支配からの人間の救済である。

そして、ここで重要なことは、人間に対する「悪魔」の支配という概念があってこそ、キリストの救済は成立するということである。それだけ、「悪魔」はキリストの大切な敵として新約聖書の中心となる存在なのである。

キリスト教において「悪魔」の存在とその重要性を否定することは、教義の発達を妨げることになる。そして、「悪魔」の存在がなければ、キリスト教自体が始めから間違っているということになる。ピーター・スタンフォード (Peter Stanford)¹⁰ は以下のように述べている。

新約聖書における悪魔とイエス・キリストの衝突は、全体を支配している。新約聖書は、イエスと悪魔の、つまり、善と悪との戦いの物語なのである。¹¹（以上、筆者訳）

また、新約聖書にとって「悪魔」が重要な存在であるということは、キリスト教にとって「悪魔」は、不可欠な存在でもあるということを示している。なぜなら、新約聖書は、キリスト教にとって、中心的な教義を示す書物だからである。ラッセルは以下のように述べている。

キリスト教における悪魔の存在と中心的な重要性を否定することは、使徒的教へとキリスト教の教義の歴史的発達に反することになる。かくして、このようにキリスト教を定義することは、文字どおり無意味なのであるから、悪魔を排除するようなキリスト教のために、議論をするなら、知的な支離滅裂さを欠くことになる。もしも、悪魔が存在しないのであれば、キリスト教の中心的な正しい点が、最初から完全にまちがっていたということになる。¹²（以上、筆者訳）

このように、「悪魔」は、新約聖書において重要な存在であるのだが、ここで注意しておかなければならないことは、「悪魔」は、単独で成立するものではないということである。「悪魔」は、イエス・キリストに対するものとして、イエス・キリストの存在があってこそ、初めて成立するものである。また、「悪魔」はキリストに対する存在、あるいは、原理として見ることによって、初めて理解することが出来る。

このようなことに注意しながら、新約聖書を分析すると、新約聖書はキリストと「悪魔」の闘いを記していることがわかる。そして、

⁹ Ibid., 166.

¹⁰ 1961年アイルランド生まれ。編集者、ジャーナリスト。

¹¹ Stanford, P. (1996) *The Devil: A Biography*, William Heinemann, p.54.

¹² Russell, J. (1981) *SATAN*. Cornell University Press. (NY, US), p.25.

キリストを「善」、「悪魔」を「悪」として定義するならば、その「善」と「悪」との闘いは、新約聖書全体を支配している。¹³ ラッセルは以下のように述べている。

デーモンや罪に堕ちた人間たちによって、助けられるサタンの活動によって、世界は悪魔の支配下に陥った。世界に起る自然の悪と道徳的な悪は善の主の失敗ではなく、これらの被造物の失敗である。悪魔が支配するこの世界と、キリストが地上にもたらした神の国との闘いは、新約聖書が強調する重要なことの一つである。¹⁴ (以上、筆者訳)

また、このような「善」と「悪」の闘いは、最終的にキリストが勝利することによって、終わりを迎える。そして、キリストが勝利することによって、「悪魔」の国は滅び、その後、神の国が到来する。

しかし、ここで重要なことは、「悪魔」がいなければ、キリストが勝利することも、神の国が到来することもない、ということである。それだけ「悪魔」は、新約聖書の中で、重要な役割を担っている。スタンフォードは以下のように述べている。

もし、悪魔がいなければ、キリストは打ち負かすべき相手がいなくなり、今ここに存在するこの世の欠点をなくす方法と『神の国』を打ち立てる方法もなくなる。¹⁵ (以上、筆者訳)

このように、初期のキリスト教は、新約聖書の中に「悪魔」をキリストの敵として描くことによって、その重要性を示してきた。では、その「悪魔」は新約聖書の中で、どのように表現されているのであろうか。

新約聖書の中に描かれている「悪魔」は、

堕天使、デーモンの軍勢の頭、悪の原理、非存在として表されている。また、「悪魔」は、人間を誘惑し、告発し、罰し、そして病気で苦しめ、とり憑きさえする存在でもある。そして、「悪魔」は、人間を攻撃して、傷つけ、罪に誘うものであり、病気や自然災害を惹き起こす存在でもある。つまり、「悪魔」は、人間にとって害を及ぼす存在なのである。¹⁶

このようなことから分析すると、新約聖書における「悪魔」は、人間にとって良くないことを引き起こす「悪」の原因として描かれていることがわかる。

神学的には、神はこの地上に神の国をもたらし、人間を救いに導くことを目的としている。そのためにキリストを遣わされた。「悪魔」は、この神の目的を阻止するために、キリストと敵対し、人間を滅ぼそうとする。まさに「悪魔」は悪そのものである。このような新約聖書における「悪魔」をラッセルは「悪の人格化」と考えている。

悪魔は、悪の人格化だった。悪魔は、人間の体に攻撃し、取り憑くことによって、身体的な傷を与えた。悪魔は、人々を騙し、罪を犯すよう誘惑して、彼らを破壊し、または主に対する戦闘に参加させた。悪魔は、罪人を告発し、罰した。悪魔は、悪霊や堕天使、デーモンの軍隊の頭だった。悪魔は、古代の破壊的な自然界の精霊や幽霊の悪い特質のほとんどを同化させた。悪魔は、主自身の国が来る時まで、この物質と身体の世界の支配者である。悪魔は、その最後の時まで、善の主に対して戦い続けるだろう。悪魔は、世界の終の時に善の主によって、打ち負かされるであろう。¹⁷ (以上、筆者訳)

また、ここでとくに注目したいのは、「悪魔」が、「悪霊」や堕天使、そして「デーモン」の軍勢の頭、だということである。

「悪魔」の組織にもランクがあり、「デーモン」や「悪霊」などは、下位に行けば行くほ

¹³ Stanford, P. *The Devil: A Biography*, op.cit, p.54.

¹⁴ Russell, J. *The Devil*, op.cit, p.231.

¹⁵ Stanford, P. *The Devil: A Biography*, op.cit, pp.54-55.

¹⁶ Russell, J. *The Devil*, op.cit, p.228.

¹⁷ Ibid., 256.

ど、その数は多くなる。新約聖書における「悪魔」は、その頭であり、「悪霊」はその子分である。そして、その頭である「悪魔」をキリストが打ち破るということは、地上における全ての「悪」を滅ぼすということを示している。

ここで、新約聖書における「悪魔」について整理する。それは、以下のように示される。

- ・悪の人格化
- ・キリストの大切な敵
- ・墮天使
- ・デーモンの軍勢の頭
- ・悪の原理
- ・非存在
- ・人間を誘惑し、告発し、罰する
- ・人間を病気で苦しめ、取り憑き、傷つける
- ・人間を攻撃し、罪に誘う
- ・人間を騙し、破壊する
- ・病気や自然災害を惹き起こす
- ・悪の原因
- ・キリストに対する戦闘に参加させる
- ・神の国が来る時まで、この世界の支配者
- ・最後の時まで、キリストに反対して戦い続ける
- ・古代の破壊的な精霊や幽霊の悪い特質を同化させた
- ・世界の終の時にキリストによって、打ち負かされる

新約聖書における「悪魔」を分析すると、新約聖書が、「悪魔」をキリストの敵として考えていることがわかる。この「悪魔」は、キリストの活動の邪魔をして、失脚させることを目的としている。そのために、「悪魔」は、人間を陥れようと攻撃を企てるのである。

また、新約聖書にとって、もっとも重要なことは、キリストによる人間の救済の実現と神の国の到来を説くことである。「悪魔」は、このことを妨害しようとするが、最終的にキリストによって滅ぼされる存在である。

このことから考えると、「悪魔」は、新約聖書が大切にしているキリストによる人間の救済

と神の国の到来を実現させるために、なくてはならない存在ということになる。このように、「悪魔」は、新約聖書にとって重要な存在なのである。

以上、新約聖書における「悪魔」について論じた。

おわりに

本論文において、新約聖書における「悪魔」の概念について考察した。

「悪魔」は、新約聖書の中心的存在である。また、「悪魔」は、神の敵対者として、人間を誘惑し、墮落させ、破壊させる存在として描かれている。具体的には、「キリストの大切な敵」、「人間を誘惑し、告発し、罰する存在」、「人間を病気で苦しめ、取り憑き、傷つける存在」、「人間を攻撃し、罪に誘う存在」、「人間を騙し、破壊する存在」、「神の国が来る時まで、この世界の支配者」などとして表される。

そして、そのような「悪魔」は、最終的にキリストによって滅ぼされる存在であるが、キリストによる人間の救済と神の国の到来を実現させるために、なくてはならない存在でもある。

このように、本論文において、新約聖書における「悪魔」の概念を考察したことによって、「悪魔」のキリスト教にとっての位置づけを整理した。

また、さらに、キリスト教の「悪魔祓い」を考察するために、次に、初期キリスト教における「悪魔」の概念について論じてみたい。

参考文献

外国語文献（アルファベット順）

- Carus, P. (1899) *"The History of The Devil And The Idea of Evil."* The Open Court Publisng Co. 舟木裕（訳）1994『悪魔の歴史』大修館書店。
- Minois, G. (2000) *"Le diable, " Que sais-je ?,* P.U.F. (Paris). 平野隆文（訳）2004『悪魔の文化史』白水社。
- Russell, J. (1977) *The Devil.* Cornell University Press. (NY, US). 野村美紀子

(訳) 1984『悪魔－古代から原始キリスト教まで』教文館.

—— (1981) *SATAN*. Cornell University Press. (NY, US). 野村美紀子 (訳) 1987『サタン－初期キリスト教の伝統』教文館.

Stanford, P. (1996) *The Devil: A Biography*, William Heinemann. 大出健 (訳) 1998『悪魔の履歴書』原書房.

日本語文献 (五十音順)

大貫隆他 (編) (2002)『岩波 キリスト教辞典』岩波書店.

キリスト教大事典編集委員会 (編) (1963)『キリスト教大事典』教文館.

リヴィングストン, E. A (編) (2017)『オックスフォード キリスト教辞典』木寺廉太 (訳) 教文館.

リチャードソン, A, ボウデン, J (編) 古屋安雄 (監) (2005)『キリスト教神学事典』佐柳文男 (訳) 教文館.

礼拝を通しての学び

―一年生全員からのアンケートを通して―（研究ノート）

佐々木謙一、山田美代子、金承子

1. はじめに

キリスト教大学の建学の精神を学生たちに直接、吹き込む場が先ず、礼拝であり、そしてキリスト教関連の授業であり、またキリスト教行事であると考え。キリスト教員が大学において率先して建学の精神を今でもこれからも問い続けていかなければならないと痛感している。しかし、静岡英和学院大学での現状の問題はキリスト教員の数が少ないということである。学長を含む宗教委員であるキリスト教員5名のうち、プロテスタント教員4名、カトリック教員1名という構成になっている。それぞれの教員が複数の委員をしている関係で、なかなか、キリスト教員がそろって宗教の行事などに参加することが難しい状況であるが、それでも今回、3名のキリスト教員が協力して学生への礼拝に関するアンケートフォームを作成し、礼拝にてアンケートを行うことが出来た。この結果をもとにして、キリスト教大学としての礼拝について、真摯に向き合って検討することにした。尚、今回は、2024年後期の礼拝日に大学一年生全員に実施したアンケートの結果と各教員が担当した学科の学生のアンケートに対する考察を記載した。引き続き、このアンケートを行い、次年度はより詳しい考察をしたいと考えている。

2. アンケート調査結果と考察

※ 実際のアンケート用紙記載事項

礼拝アンケート

2024年後期実施

- あなたはキリスト教信者ですか？ はい いいえ
- あなたは教会に行ったことがありますか？
① 一度も行っていない ② 一度だけ行った
③ 複数回行った → () 回行ったことがある
- あなたは大学入学前に、キリスト教主義学校に通いましたか？ はい いいえ
⇒ それは _____ の時。
★ _____ の中には幼稚園、保育園、小学校、中学校、高校を入れる。
- あなたはこの大学がキリスト教主義学校であることに対してどのようなイメージをお持ちですか？
キリスト教大学であることを _____ だと思う。
★ _____ の中にあなたのイメージについてお書きください。

5. 礼拝について今、どんな風に感じていますか？

- ① 良い時間である ② 時々、良いと感じる
③ なんとも感じない ④ 義務だから仕方がないと思っている

6. 礼拝の時、自分で、祈ったことがありますか？（たとえば、家族のこと、自分のこと、被災地のこと、自分の国のこと……など）

- ① よくある ② 時々、祈る ③ 祈ったことがある ④ まったく祈らない

7. 礼拝での讃美歌はどのように感じていますか？

- ① 心地よい ② 讃美歌の歌の内容が難しくて歌えない
③ 周りが気になるので歌えない ④ 歌いたくない

8. 礼拝での話はどうですか？

- ① 共感する ② 共感することもある ③ あまり聞かない

9. 礼拝を通じて得たものについて。「これまでの礼拝参加を通して学んだことや心に残ったことがあれば教えてください。」

10. 最後におたずねします。あなたの学科、性別、日本人か留学生かを教えてください。

① 学科

② 性別

③ 国籍 留学生のみ出身国をお書きください（ ）

アンケートは以上になります。ご協力、ありがとうございました！

(1) 人間社会学部

担当 佐々木謙一

問1 あなたはキリスト教信者ですか？	はい	4				
	いいえ	86				
問2 あなたは教会にいったことがありますか？	一度も行ったことがない	67				
	一度だけ行った	9				
	複数回行った	8				
	複数回行った事がある場合の回数	2回	2～3回	20回	毎週1回	100回
問3 あなたは大学入学前にキリスト教主義学校に通いましたか？	はい	10				
	いいえ	76				
問3の2 はい、の場合どの時か（複数回答可）		幼稚園 2	保育園 2	小学校 1	中学校 5	高校 7
問4 あなたはこの大学がキリスト教主義学校であることにに対してどのようなイメージをお持ちですか？	特に気にしない	49				
	悪いイメージはない	2				
	良いことだと思う	18				
	その他	18				
		とても熱心にキリストや神を信仰している				
		他宗教の留学生も多く受け入れており良い				
		礼拝をしている				
		イベントが多いイメージ				
		清廉なイメージがある				
		神様をお祈りするイメージ				
		今までキリスト教系の学校に通ったことがなかったので新しい経験				
		礼拝などキリスト教らしいことなどが授業に組み込まれていて新鮮				
		学校全体が温かい雰囲気				
		規律を重んじる				
		隣人愛を大切にしている				
		キリスト教という基礎があるから信用ができる				
		少しマナーには厳しい				
		イエス・キリストのことがたくさん学んだ				
		珍しくて、宗教に対する厳しいかも（昔はそうだった）				
		最初は少し怖いイメージを持ったが、今は怖いとは思わなくなった				
		キリスト教の在り方や雰囲気を味わう経験になる良い機会が得られる				
		キリスト教の礼拝や考え方に触れることのできる機会				
問5 礼拝について今、どんな風に感じていますか？	良い時間である	18				
	時々良いと感じる	19				
	なんとも感じない	27				
	義務だから仕方がない	22				
問6 礼拝の時、自分で、祈ったことがありますか？	よくある	8				
	時々祈る	13				
	祈ったことがある	30				
	まったく祈らない	35				
問7 礼拝での讃美歌はどのように感じていますか？	心地よい	44				
	内容が難しくて歌えない	9				
	周りが気になるので歌えない	20				
	歌いたくない	13				
問8 礼拝での話はどうですか？	共感する	14				
	共感することもある	58				
	あまり聞かない	14				
問9 礼拝を通じて得たものについて。「これまでの礼拝参加を通して学んだことや心に残ったことがあれば教えてください。」	このチャペル礼拝を通してよりキリストや神を身近に感じることができた					
	オルガンの音がいい					
	好きな歌ができた					
	先生方のお話が興味深い					
	先生方がして下さる話がとても勉強になる					
	賛美歌を聞く時間が増えた					
	信者ではないが人の為に祈る事は尊い事だと感じている					
	特にありません					
	賛美歌が美しい					
	普段からは考えられないので貴重でいい時間だと思う					
	キリストの大学にいますから神を尊敬している					
	いろんな人のことを愛そうと思った					
	一週間の出来事を振り返るようになった					
	これから一週間で起こることを考えるようになった					
	案外祈りを捧げた時って上手く行ってる時があるように感じる					
	自分を見つめ直すことの大事さ					
	自分の好きな讃美歌も増え家で歌ったりしている					
	礼拝に参加してきたことで新しい自分に出会えた気がする					
	聖書の内容を通じて社会を見ることの大切さを学んだ					
	心を落ち着かせること					
	隣人愛を大切にし自分も大切にすること					
	自分を見つめ直す時間を得られる					
	これからの人生にためになることが多くて心に残る					
	一人で考える時間が好きだとわかった					
	周りの人を大切にすることで良い行いが自分にもかえってくることを学んだ					
	1日1日の幸せを祈る大切さを学んだ					
	祈ることにより心によりどころができた					

	隣りの人に対する態度					
	より神を信じるようになった					
	礼拝を通して神の存在をより身近に感じられることを学んだ					
	さまざまな宗教を尊重している					
	自分の人生にとってポジティブで良いことがあればそれを適用する					
	新しい知識を得るために説教を聞く					
	キリスト教を信仰していなくても私生活には近しいものがいくつもある					
	説教を聴くことで世界での出来事を宗教的な視点から観察できるようになった					
	今は他の人の痛みや苦しみなどもっと感じられます					
	相手のことを愛なさい					
	礼拝をする機会は自分では作ろうとしないと思う					
	奨励の中での話が日常に通ずるものだと知った					
問10 最後におたずねします。あなたの学科、性別、日本人か留学生かを教えてください。						
学科	人間社会学部					
	86					
性別	男	女				
	36	50				
国籍	インドネシア					
	ミャンマー					
	ベトナム					
	中国					

人間社会学部 90 名 《アンケート結果に対するコメント》

人間社会学部の学生 90 人が答えたアンケート調査の結果を以下にまとめる。

1. キリスト教信者の割合について

キリスト教信者の学生は少数である。全 90 名のうち、4 名のみ「信者である」と答えた。

4 名のうちカトリック 2 名、バプテスト 1 名、福音派 1 名である。

2. 教会に行った経験について

教会に行ったことがあるかの質問については、「行ったことがない」が 67 名、「行ったことがある」が 9 名、「複数回行ったことがある」が 8 名であった。この結果から、キリスト教信者以外にも教会に行ったことがある学生が少数ではあるがいるということがわかる。

3. 入学前にキリスト教主義学校に通った経験について

キリスト教主義学校に通った経験のある学生は 10 名であった。ここには、問 1 で「キリスト教信者である」と答えた学生も含まれていると考えられる。

4. どの時期、キリスト教主義の学校に通ったかについて

複数回答で、幼稚園 (2 名)、保育園 (2 名)、小学校 (1 名)、中学校 (5 名)、高校 (7 名) と答えており、そのうち、「幼稚園から高校まで」が 1 名、「小学校から高校まで」が 1 名、「中学と高校」が 3 名であった。

5. キリスト教主義大学に対するイメージについて

キリスト教主義大学に対するイメージを自由記述で回答してもらった結果、最も多く書かれたものは、「よい」、「いいと思う」、「とてもいいこと」などであり、15 名からポジティブな回答を得た。その他、「チャペル礼拝を通じてとても熱心にキリストや神を信仰しているのだと感じた」、「今までキリスト教系の学校に通ったことがなかったので新しい経験だと思う」、「礼拝などキリスト教らしいことなどが授業に組み込まれていて新鮮だと思う」、「学校全体が温かい雰囲気だと思う」、「イエス・キリストのことをたくさん学んだ」という意見が 6 名あり、キリスト教主義大学であること

に珍しさや個性を感じる学生も多くいた。

しかし、「興味なし」、「特に何も思わない」と回答した学生が割合としては多くいたということも懸念事項である。

6. 礼拝に対する感じ方について

18名の学生が礼拝に対して「良い時間である」と答え、19名の学生が「時々良いと感じる」と答えた。しかし、「義務として出席している」と答えた学生が22名いたことも懸念されることである。

7. 礼拝で祈ったことがあるかについて

「良く祈る」と答えた学生が8名、「時々祈る」が13名、「たまに祈ることがある」が30名であった。このことから、全体の半分以上の学生が「祈ったことがある」ということがわかる。

8. 礼拝で讃美歌を歌うかについて

讃美歌について「心地よい」と答えた学生は44名である。一方、「讃美歌の歌の内容が難しくて歌えない」が9名、「周りが気になるので歌えない」が20名、「歌いたくない」が13名であり、歌えない学生が約半数いることがわかる。本年度は、讃美歌を持参しないために歌えない学生に対して、賛美歌を印刷して用意するといったことを試みた。その結果、賛美歌について「心地よい」と答えた学生の割合が、例年より高いことがみられる。

9. 礼拝の話について

礼拝の話について、「共感する」と答えた学生が14名、「共感することもある」と答えた学生が58名であった。礼拝のテーマは毎週異なるため、学生自身にとって興味のある内容には、共感をおぼえるという結果であると推測できる。

10. 礼拝を通じて得たものについて

礼拝を通じて得たものについて、約半数の学生が未記入であった。記入された回答の中で目立ったものは、「より神を信じるようになった」、「神の存在をより身近に感じられるようになった」などの回答であり、この他に「いろんな人のことを愛そうと思った」、「信者ではないが人の為に祈る事は尊い事だと感じている」、「聖書の内容を通じて社会を見ることの大切さを学んだ」など、ポジティブな意見が多くみられた。

《総括》

キリスト教信者の学生は少数であり、教会に行った経験やキリスト教主義学校に通ったことのある学生は少ないが、多くの学生がキリスト教主義大学に対する肯定的なイメージを持っていることが明らかになった。また、キリスト教主義に基づく教育は、本学の個性や特徴として、学生達に印象付けられていた。

礼拝の時間や讃美歌に対しては、義務だから仕方なく参加しているといった意見も少数あったが、良い時間として心地よく過ごしていることがわかった。礼拝に対する意見を参考にしながら、今後の学生たちのキリスト教や宗教、礼拝に対する考え方の変化など、学生の心に及ぼすキリスト教関連の環境や行事の影響などを観察していく必要がある。

2024 年度 礼拝についてのアンケート結果報告 短期大学部 現代コミュニケーション学科

担当 山田美代子

2024 年度礼拝において、短期大学部現代コミュニケーション学科学生を対象としたアンケート調査結果は次の通りである。

実施日及び回答者

実施日：2024 年 11 月 13 日（水）礼拝終了後

回答者：男性 10 名（内 8 名留学生）女性 30 名（内 1 名留学生）

【問 1】 あなたはキリスト教徒ですか？

	後期 / 40 名中
①はい	4 名（10.0%）
②いいえ	36 名（90.0%）
③無回答	0 名

【問 2】 あなたは教会へ行ったことがありますか？

	後期 / 40 名中
①一度もない	28 名（70.0%）
②一度だけ	9 名（22.5%）
③複数回	3 名（7.5%）
④無回答	0 名

【問 3】 あなたは大学入学前に、キリスト教主義の学校に通いましたか？

	後期 / 40 名中
①はい	7 名（17.5%）*
②いいえ	33 名（82.5%）
③無回答	0 名

* 幼稚園 5 名、保育園 3 名、小学校 1 名、中学校 3 名、高校 5 名（重複有り）

【問 4】 あなたはこの大学がキリスト教主義の大学であることに對してどのようなイメージをお持ちですか？キリスト教大学であることを だと思う。

	後期 / 40 名中
①特に気にしない	17 名 (42.5%) * 内 1 名が肯定的
②良いことだと思う	15 名 (37.5%) *
③その他	7 名 (17.5%) * 内 5 名が肯定的 1. おもしろそう * 2. 信者ではないからこそ貴重な体験になっている * 3. キリスト信じすぎている 4. 珍しい 5. 人に対して思いやり優しさを意識できる学校 * 6. 自分と向き合える * 7. 12 年間クリスチャンスクールに通ったのは良かった * (キリスト教の考え方は共感できるため、学び甲斐がある①*) (聖書に書いてあることがこれからの経験への参考にも成り得る為、礼拝の機会が設けられているのは少し心強いと思う②*)
④無回答 該当なし	1 名 (2.5%)

【問 5】 礼拝について今、どんな風に感じていますか？

	後期 / 40 名中
①良い時間である	12 名 (30.0%)
②時々良いと感じる	15 名 (37.5%)
③何とも感じない	8 名 (20.0%)
④義務だから仕方ない	5 名 (12.5%)
⑤無回答	0 名

【問 6】 礼拝の時、自分で祈ったことがありますか？

	後期 / 40 名中
①よくある	9 名 (22.5%)
②時々祈る	4 名 (10.0%)
③たまに祈ったことがある	16 名 (40.0%)
④全く祈らない	11 名 (27.5%)
⑤無回答	0 名

【問 7】 礼拝で讃美歌はどのように感じていますか？

	後期 /40 名中
①心地よい	22 名 (55.0%)
②内容が難しくて歌えない	7 名 (17.5%)
③周りが気になるので歌えない	8 名 (10.0%)
④歌いたくない	3 名 (7.5%)
無回答	0 名

【問 8】 礼拝での話はどうですか？

	後期 / 40 名中
①共感する	9 名 (22.5%)
②共感することもある	25 名 (62.5%)
③あまり聞かない	6 名 (15.0%)
④無回答	0 名

【問 9】 礼拝を通じて得たもののはについて「これまでの礼拝参加を通して学んだことや心に残ったことがあれば教えてください」（自由記述）

- ・心を清らかにする力
- ・先生の言葉を有難く受け止められた
- ・オルガンが綺麗。あとは、心が安らか
- ・説教が心に残ることがあった
- ・神を祈ればいいことがある
- ・心落ち着かせることができる時間を作ることは大切だと思いました
- ・次週の歌を歌ってくださる先生の声が透き通るように美しく讃美歌はいいものだと思っけたこと
- ・穏やかな心や考え方
- ・人にやさしくあること
- ・讃美歌を歌うことがいつでも好きです
- ・人生のコツ
- ・生きるということ
- ・週に一回以上は精神的に安定する時間をもうけた方が良いということ
- ・一日中元気でした
- ・心がリラックスした気分になります
- ・I learned something good
- ・参拝すると心に平安が感じられます

【問10】 最後におたずねします。あなたの学科、性別、日本人か留学生かを教えてください。

現代コミュニケーション学科

男性：10 名 女性：30 名

国籍：スリランカ 3 名、中国 1 名、バングラディッシュ 3 名、ネパール 2 名

まとめ

今回の 2024 年度アンケート調査は、後期一回のみの実施だったが、2017 年度（前期・後期各 1 回）に行ったものと 1 ほぼ同じ調査内容であった。そこで、2017 年度調査と比較しながら現代コミュニケーション学科における礼拝を通しての学びについての実態により明らかになったことを報告する。尚、本学キリスト教年報第 6 号においても、筆者は今回同様に現代コミュニケーション学科を担当で、前期と後期各一回の調査実施し、礼拝経験の回数を重ねたことで変化したと思われる項目を中心に報告をしている。

【問 1】 キリスト教徒について

わが国におけるキリスト教系人口は、文化庁統計（2022 年 12 月 31 日時点）によると、0.8% である。現代コミュニケーション学科学生においては、40 名中 4 名（10%）で、2017 年度調査（以下、前回調査とする）前期 66 名中 4 名（6.1%）、後期 50 名中 1 名（2%）と比較して、その割

合は高くなっている。

【問 2】 教会訪問について

一度だけ 9 名 (22.5%)、複数回 3 名 (7.5%)、計 12 名 (30%) である。前回調査では前期 17 名 (25.8%)、後期 15 名 (30%) とほぼ同程度である。

【問 3】 キリスト教系の保育施設、学校出身者 (乳幼児期～高校まで)

40 名中 7 名 (17.5%) であった。前回調査では前期 6 名 (9.1%) 後期 2 名 (4%) でキリスト教主義の施設・学校出身者の割合は高くなっている。

【問 4】 キリスト教主義の大学に対するイメージ

「特に気にしない」17 名 (42.5%) と無回答 (該当なし) 1 名 (2.5%) を除いて、良いイメージを持っているのは 21 名 (52.5%、内 1 名は特に気にしないとしながらその他の欄に好印象の記述をしている) で約半数であった。その他、特色としての記述「めずらしい」1 名、否定的回答と思われる記述「キリスト信じすぎている」1 名 (2.5%) があった。前回調査では自由記述による回答方法であったが、否定的な記述は前期「嫌い」2 名 (3%)、後期「変」「あまりよくない」「違和感がある」3 名 (6%) で、無回答数も約半数近くであったことから、今回の調査では良い印象を持つ人が多く、否定的な人の割合は減少していると言える。

【問 5】 礼拝について感じていること

「良い時間」12 名 (30.0%)、「時々良いと感じる」15 名 (37.5%)、計 27 名 (67.5%) が、礼拝について好印象をもっているのに対して、「義務的に感じている」5 名 (12.5%) であった。前回調査では、好印象は前期 19 名 (28.8%)、後期 26 名 (52%) で、「義務的に感じている」は前期 23 名 (34.8%)、後期 17 名 (34%) であったことから、今回の調査では礼拝を良い時間であると感じている割合は高く、義務的に感じて消極的出席の割合は大きく減少している。

【問 6】 礼拝の「祈り」について

「祈った (よく祈る、時々祈る、祈ったことがある)」は、29 名 (72.5%) で、前回調査前期 32 名 (47.5%)、後期 31 名 (62%) と比較すると高い割合であった。「全く祈らない」は、今回 11 名 (27.5%) で、前回前期 33 名 (50%)、後期 18 名 (36%) と比較して減少している。

【問 7】 礼拝の「讃美」について

「心地よい」の回答者は 22 名 (55%) で、前回調査前期 13 名 (19、7%)、後期 11 名 (22%) と比較して高い割合であった。「歌いたくない」と回答した人は、3 名 (7.5%) で、前回調査前期 11 名 (16.7%)、後期 10 名 (20%) と比較してその割合は低かった。

2024 年度の礼拝では、佐々木宗教主任の発案で式次第と共に礼拝当日と次週予定の讃美歌のコピー譜が配布され、礼拝後に宗教委員 (筆者) により翌週の讃美歌の練習を実施している。そうした環境による影響が考えられる。「次週の歌を歌ってくださる先生の声が透き通るように美しく讃美歌はいいものだと感じた」「讃美歌を歌うことがいつでもすきです」は、担当者として嬉しいコメントである。

【問 8】 礼拝の「話し」について

34 名 (85%) が「共感する」、また「共感することもある」と回答している。前回調査と回答内容項目が異なるため比較は難しいが、かなり高い割合である。

【問 9】 礼拝参加を通して学んだことや心に残ったこと (自由記載)

宗教委員 (金教授) による発案で、今回新たに設けられた項目である。現代コミュニケーション学科の 17 名 (42.5%) の学生が、礼拝への思いを自らの言葉で表現しており、全員の言葉を繋ぎまとめると次のようになる。

礼拝で話を聴き、美しいオルガンの奏楽に合わせ賛美し祈ることで、心が清らかになる・落ち着く・穏やかになる・安らかになる・リラックスする・人にやさしくある力となる。週一回の聖別された礼拝は、平安を感じる大切な時である。

全体のまとめ

今回のアンケート調査で明らかになったことは、前回調査時よりキリスト教系の施設や学校出身者が増えていること、キリスト教主義の本学や礼拝に対して良い印象をもっていることが分かった。また礼拝の中で72.5%の学生が祈りを捧げた経験があり、55%の学生が讃美歌を歌うことに心地よいと感じ、お話しに対しても85%の学生が共感すると答えており、良いイメージを持って礼拝に臨んでいることが明らかになった。

現代コミュニケーション学科回答者の40名の内9名(22.5%)が留学生で、他宗教を信仰している可能性が高いにも関わらず、礼拝に出席する時間を心地よいと感じており、全体の項目において否定的回答が少なかったことから、週一回のチャペルでの聖別した空間で過ごす礼拝の時間を肯定的に捉えていることが理解できる。

今後の展望

本学の建学の精神に基づいた教育の根幹となる礼拝は、開学時より毎週続けられている。礼拝を通しての学びの実態を把握することは、「キリスト教教育の意味」を理解し共有する上で重要である。本学には留学生が多く在籍しており、他宗教を信仰していることも考えられる。そのような学生が、学生生活を送る上で必要とする環境整備を大学全体で検討していく必要があると考える。

文献

1. 文化庁(2024年): 令和5年の宗教統計調査の結果
2. 伊勢田奈緒、中原陽三、山田美代子、崔映、金承子(2018年): 礼拝を通しての学び一年生全員からのアンケートを通して(2)(研究ノート), キリスト教研究年報、第6号 p44 - 47

2024 年度 礼拝についてのアンケート結果報告

―短期大学部 食物栄養学科―

担当 金 承子

1. はじめに

本調査は、2024 年 11 月に本学の「キリスト教研究会」が 1 年生を対象に実施したアンケート調査を基に、本学の短期大学部食物栄養学科 1 年生の礼拝に対する意識や関心を分析したものである。この調査は、2016 年の前期に実施され¹、2017 年には前期と後期の 2 回に分けて実施されたが²、しばらく中断されていた。2024 年後期（11 月）、約 6 年ぶりに再開され、2017 年度の調査を継承する形で行われた。

本調査の目的は、学生たちの礼拝に対する態度や理解を明らかにし、キリスト教教育の意味を深めることで、本学の「建学の精神」の分かち合いを向上させることにある。また、学生たちの宗教的価値観や文化的背景が多様化する中で、キリスト教信者の割合が低い現状を踏まえ、礼拝がどのように受け止められているかを検証し、教育方針の改善に活かすことを目指している。

アンケートは 10 項目から構成され、回答者全員が 1 年生で、総回答者数は 34 名であった。分析の結果、学生たちの多様な視点や礼拝に対するさまざまな反応が浮かび上がり、礼拝が一部の学生にとって重要な学びや精神的安らぎの場である一方、多くの学生にとっては義務的な活動として捉えられていることが明らかになった。

以下では、回答者の基本的な概要を示し、各設問に基づく分析結果や洞察を詳しく解説する。この分析を通じて、学生たちの礼拝に対する意識や態度をより深く理解し、今後の教育やサポート体制の向上につなげられることを願っている。

2. 集計結果の概要

1) 回答者

〈表 1〉

	全体	有効回答数
実数	34 人	34 人
構成比	100.0%	100.0%

2) 性別（質問 10）

〈表 2〉

	全体	男性	女性
実数	34 人	5 人	29 人
構成比	100.0%	14.7%	85.3%

¹ 伊勢田奈緒・中原陽三・山田美代子・崔映・金承子「礼拝を通しての学び―一年生全員からのアンケートを通して―（研究ノート）(1)」『キリスト教研究年報』第五号、p.27-37, 2017 年 3 月。

² 伊勢田奈緒・中原陽三・山田美代子・崔映・金承子「礼拝を通しての学び―一年生全員からのアンケートを通して―（研究ノート）(2)」『キリスト教研究年報』第六号、p.25-54, 2018 年 3 月。

3) 国籍 (質問 10)

〈表 3〉

	全体	日本人	留学生
実数	34 人	34 人	0 人
構成比	100.0%	14.7%	0.0%

3. 質問別結果の分析

1) キリスト教信者の有無 (質問 1)

〈表 4〉

	全体	はい	いいえ	無回答
実数	34 人	1 人	33 人	0 人
構成比	100.0%	2.90%	97.1%	0.0%

〈洞察〉(質問 1) の結果から、次の 3 つの特徴が見られる。

- (1) キリスト教信者は非常に少ない: 回答者 34 名のうち、キリスト教信者はわずか 1 名 (2.90%) で、非信者が大多数 (97.1%) を占めている。このことは、学科や大学に所属する学生の宗教的背景が多様であり、キリスト教を信仰していない学生が主流であることを示している。
- (2) 多文化的・非宗教的な背景がうかがえる: 非信者が大半を占めることから、学生たちはさまざまな文化や宗教的背景を持つか、宗教にとらわれない立場である可能性がある。この結果は、礼拝や宗教教育が必ずしも学生の信仰に基づいていないことを反映していると考えられる。
- (3) 無回答者がいない: 無回答が 0% である点は、全員が質問内容を理解し、回答したことを示している。アンケートの設計や説明が適切であり、回答しやすい形式であったと評価できる。

2) 教会に行った回数 (質問 2)

〈表 5〉

	全体	一度もいったことがない	一度だけ行った	複数回行った	無回答
実数	34 人	27 人	5 人	2 人	0 人
構成比	100.0%	79.4%	14.7%	5.9%	0.0%

〈洞察〉全体として、回答者の大多数が教会に行った経験がないか、あっても限定的であることから、学生の間で宗教的関与が薄い傾向が見られる。これは、学生が宗教的儀式や活動に関して個人的興味や必要性をあまり感じていない可能性を示唆している。さらに詳しく説明すると、次のようになる。

(1) 教会に行った経験がほとんどない

回答者の 79.4% (27 名) が「一度も行ったことがない」と回答している。これにより、多くの学生が教会という宗教的空間に触れる機会がないことが明らかである。これは、宗教的行事や場所が学生の日常生活にあまり関与していない可能性を示している。

(2) 限られた経験

「一度だけ行った」と回答した学生が 14.7% (5 名)、「複数回行った」と回答した学生が 5.9% (2 名) にとどまっている。このことから、教会に行った経験があっても、それが頻繁なものではなく、多くの場合単発的な体験にとどまっていると考えられる。

(3) 無回答者がいない

無回答が 0% であることは、全員が質問内容を理解し、回答できたことを示している。アンケートの設計が適切で、答えやすい形式であったと評価できる。

3) 大学入学前のキリスト教主義学校への通学有無（質問3）

〈表6〉

	全体	はい（★参照）	いいえ	無回答
実数	34人	3人	31人	0人
構成比	100.0%	8.8%	91.2%	0.0%

* ★は、幼稚園、保育園、小学校、高校の時の通学の状況を記入してもらった。

〈洞察〉この質問は、キリスト教主義教育を経験していない大多数の学生が、大学での礼拝や宗教教育をどのように受け止めるかを考える上で重要な基盤となる。補足として、次の点が挙げられる。

(1) キリスト教主義学校への通学経験が少ない

回答者の91.2%（31名）が「通学経験がない」と回答し、キリスト教的教育環境で学んだ経験がほとんどないことが示されている。

(2) 特定の教育段階での経験

「はい」と回答した3名は、幼稚園や高校など特定の期間に通学していた。このことから、キリスト教主義学校に通学する経験があったとしても、それが教育全体を通じたものではないことがわかる。

(3) 多様な教育背景

大半の学生が非キリスト教主義学校で学んでおり、多様な宗教的または非宗教的背景を持つことがわかる。これは、大学での礼拝が新しい体験になる可能性を示している。

(4) 無回答者がいない

無回答が0%であることから、全員が質問を理解し、回答したことが確認でき、アンケート設計が適切であったと言える。

(5) 礼拝の新鮮さ

キリスト教学校への通学経験が少ないことから、礼拝や宗教的行事が多く of 学生にとって新鮮で非日常的な体験となっている可能性がある。これにより、礼拝や宗教教育が学生の視野を広げる機会として機能する可能性があると言える。

4) 本学がキリスト教大学であることに対するイメージ（質問4）

〈表7〉

	全体	特に気にしない	悪いイメージはない	良いことだと思う	その他（★参照）	無回答
実数	34人	24人	0人	4人	6人	0人
構成比	100.0%	70.6%	0.00%	11.8%	17.6	0.0%

* ★は、その他のイメージとして次のような意見が述べられた。優しさがある、独特な雰囲気がある、素敵、宗教、あまり言いたくない、あまりいいイメージではない。

〈洞察〉本学がキリスト教大学であることについて、学生の70.6%が「特に気にしない」と回答しており、中立的または無関心な姿勢が大半を占めている。一方で、11.8%の学生が「良いことだと思う」と回答し、キリスト教的背景をポジティブに評価していることが分かる。また、「その他」の回答には肯定的（例：「優しさがある」「素敵」）と否定的（例：「あまりいいイメージではない」）な意見が混在しており、本学のイメージが多様に捉えられていることを示している。

さらに、「悪いイメージはない」という回答がゼロであった点から、明確な否定感情を持つ学生は少ないと考えられる。また、無回答が0%であったことは、質問の構成が回答しやすいもの

であったことを示している。これらの結果は、本学のキリスト教的価値観を学生にどう伝えるべきかを考えるための重要な基盤となるでしょう。

5) 礼拝について今、どんな風に感じているのか (質問 5)

〈表 8〉

	全体	良い時間である	時々、良いと感じる	何とも感じない	義務だから仕方がない	無回答
実数	34 人	3 人	7 人	6 人	18 人	0 人
構成比	100.0%	8.8%	20.6%	17.6%	53.0	0.0%

〈洞察〉礼拝について肯定的な意見（「よい時間である」＋「時々、良いと感じる」）を持つ学生は 10 名（29.4％）に留まり、約 3 割程度であることが分かる。一方、否定的または中立的な意見（「何とも感じない」＋「義務だから仕方がない」）を持つ学生は 24 名（70.6％）で、礼拝を義務的に感じている割合が非常に高い（53.0％）ことが際立っている。

6) 礼拝の時に自分で祈ったことの有無 (質問 6)

〈表 9〉

	全体	よくある	時々祈る	たまに祈ったことがある	まったく祈らない	無回答
実数	34 人	0 人	2 人	11 人	21 人	0 人
構成比	100.0%	0.00%	5.8%	32.4%	61.8%	0.0%

〈洞察〉祈る行動を実践する学生は少ない。「よくある」（0.0％）や「時々祈る」（5.8％）といった定期的に祈りを行う学生は非常に少ない。また、「たまに祈ったことがある」と回答した学生が 11 名（32.4％）おり、時折祈りを試みた経験はあるものの、習慣化されていないことが分かる。一方、「まったく祈らない」学生が 21 名（61.8％）と最も多く、礼拝中に祈る行動を取らない学生が大多数を占めている。

7) 礼拝での讃美歌に対する感じ (質問 7)

〈表 10〉

	全体	心地よい	内容が難しくて歌えない	周りが気になるので歌えない	歌いたくない	無回答
実数	34 人	8 人	6 人	9 人	11 人	0 人
構成比	100.0%	23.5%	17.6%	26.5%	32.4%	0.0%

〈洞察〉讃美歌へのポジティブな感情が少数であることが分かる。「心地よい」と感じた学生は 23.5％（8 名）であり、讃美歌を肯定的に捉えている学生は全体の約 4 分の 1 にとどまっている。一方で、「歌いたくない」という否定的な回答が最も多く、32.4％（11 名）を占めている。

8) 礼拝での話しについて (質問 8)

〈表 11〉

	全体	共感する	共感することもある	あまり聞かない	無回答
実数	34 人	1 人	20 人	13 人	0 人
構成比	100.0%	2.94%	58.83%	38.23%	0.0%

〈洞察〉「共感することもある」という回答が最も多く、58.83％（20 名）を占めている。これは全体の半数以上にあたるため、多くの学生が礼拝での話に部分的に共感や興味を持っていることを示している。一方で、「共感する」と回答した学生はわずか 2.94％（1 名）で、すべての学生

に深く響いているわけではないことが分かる。この結果から、完全に共感している学生は少ないと言える。

また、「あまり聞かない」と回答した学生は38.23%（13名）おり、一定数の学生が礼拝での話に魅力を感じていない、または関心が薄い可能性があることを示している。一方、「無回答」は0%で、全員が何らかの形で意見を述べていることが分かる。この点から、質問が分かりやすく構成されており、回答しやすい内容であることがうかがえる。

- 9) 礼拝を通じて得たものについて「これまでの礼拝参加を通して学んだことや心に残ったことがあれば教えてください。」（質問9）

〈表12〉

* 有効回答件数 (7)
自分たちが普通に生活できていることが幸せだと毎週再確認することができる
初めて礼拝というものをしたのでいい経験になったと思う
心を落ち着かせる場所であるため、歌や祈りは大切であると学んだ
讃美歌の音色がきれい
色々な考えがあると思った
少し支えられる言葉もあった
自殺者が年々増えている

〈洞察〉礼拝は、感謝の再確認、新たな経験、精神的安らぎの提供、そして社会問題への意識を高める場として、さまざまな役割を果たしている。しかし、回答者は7名と少数であるため、全学生の意見を反映しているとは言い切れず、さらなる調査が必要だと思われる。また、礼拝が学生個々にどの程度深い影響を与えられるかについては、意見が分かれる可能性があることも示されている。

4. 「2017年度」と「2024年度」のアンケート結果比較

1) 共通点

- (1) 宗教的背景の多様性：キリスト教徒の割合が非常に少なく、教会に行った経験がない学生が大多数を占める。
- (2) 礼拝の受け止め方：礼拝を義務的と感じる学生が多い一方で、感謝や安らぎを感じる学生も定数存在。

2) 2017年度の特徴

- (1) 肯定的な意識の増加：前期と後期を比較すると、礼拝やキリスト教主義に対する肯定的な記述が増加。
- (2) 無関心層の変化：無関心や否定的な回答が減少し、礼拝を「良い時間」と感じる学生が増加。
- (3) 祈りの実践：後期では祈りを行う学生が増え、「まったく祈らない」という回答が減少。

3) 2024年度の特徴

- (1) 多様性への配慮：学生の多様な価値観や背景を考慮し、礼拝が一部の学生にとって「安らぎ」や「振り返りの時間」として受け入れられる傾向が見られた。
- (2) ポジティブな感情の増加：「義務」や「怖い」という感覚から、「素敵」や「自分を振り返る時間」への肯定的な変化が観察された。
- (3) 定性的意見の重要性：回答者の具体的な記述により、礼拝の経験が学生の内面的な変化に繋がっていることが示唆された。

4) 統合的な考察

両年度の結果から、礼拝が学生に与える影響は義務的なものから精神的な安らぎや価値ある時間へと変化しつつあることが分かった。特に、非信者である学生の間で肯定的な意識が育まれつつある点は、大学の礼拝が持つ可能性を示唆している。

5. おわりに

これまで、2024年度における本学短期大学部食物栄養学科のアンケート調査結果について説明し、2017年度の同学科の調査結果と比較しながら、その変化について考察してきた。これにより、学生たちの礼拝に対する意識や態度に変化が見られることが明らかとなった。具体的には、どちらの年度においても、学生の多くがキリスト教信者ではないことに変わりはないものの、礼拝や教会といったキリスト教的価値観を共有する場に対する関心や関与には、一定の変化が認められる結果となった。このような変化は、学生たちの価値観や生活環境の影響を反映していると考えられる。こうした結果を受け、学生がより主体的に礼拝や大学生活に向き合うための環境づくりが大切であるといえる。そのためには、まず、多様性を大切にした教育環境をさらに充実させることが求められる。学生たちがさまざまな価値観を共有し、お互いの意見を交換しながら、互いの背景や考え方を理解する機会を増やすことで、多様性への理解が深まることが期待される。

また、宗教行事への理解を広げるための取り組みも重要である。教会訪問や宗教行事への参加を気軽に行えるような機会を設けることで、学生たちは日常とは異なる体験を通じて新たな発見を得ることができる。このような活動を通じて、視野が広がり、宗教的価値観に対する理解が自然に深まることが期待される。

さらに、大学の理念やキリスト教的価値観を分かりやすく伝える取り組みも必要である。たとえば、大学主催のイベントやセミナーを通じて、学生たちがキリスト教の考え方や大学の目指す価値観に触れることができる機会を提供することが考えられる。そのような場を通じて、学生たちが自ら考え、自らの成長を感じられるようなきっかけを提供することができるだろう。

これらの取り組みを進めることで、学生たちが礼拝や大学生活をより積極的に受け入れ、自らの学びや成長のための大切な時間として向き合えるようになることを期待している。大学全体としては、こうした環境を整備することで、学生一人ひとりが主体性を持ち、充実した学生生活を送ることができるキャンパスの実現が期待される。

永山学長へのインタビュー

2022年9月から静岡英和学院大学学長に就任された永山ルツ子先生に、キリスト教と大学という観点から、先生の今の思いを語っていただきました。

* 永山学長の思い

インタビューアー 学生 程一寒、堀川幸喜、宮川大和
(人間社会学部1年 学生企画部)
記録 宗教主任 佐々木謙一

このインタビューは、2025年1月15日(11時45分～12時30分)に新館大会議室において行われました。

緊張している様子の学生企画部の学生3名が学長に挨拶してから、インタビューが始まりました。

(程)「好きな聖書箇所と讃美歌を教えてくださいませんか？」

学長「聖書については二つあります。一つ目は申命記31章8節、『主ご自身があなたに先立って行き、あなたと共におられる。主はあなたを置き去りにすることも、見捨てることもない。恐れてはならない。おののいてはならない。』ヨシュア記1章5節、この二つはリンクしているのですが、『あなたの命の続くかぎり、誰一人あなたの前に立ちはだかる者はいない。私がモーセと共にいたように、私はあなたと共にいる。あなたを見放すことはなく、あなたを見捨てることもない。』この二つがわたしの好きな言葉です。讃美歌は、453番『きけやあいのことばを』です。マーチング的なのが好きなので選ばせていただきました。」

(堀川)「静岡英和学院大学に来られたきっかけを教えてくださいませんか？」

学長「私は元々広島県の県立大学で教えていました。ただ、そこは医療学系の大学で心理学のコースがなかったんですね。たまたま静岡英和学院大学が短大から四年制に上がるときに、心理学のコースを作ろうということになって、知り合いの先生から心理学コース設立のために手伝ってくれないかということで、こちらの方に来るきっかけになりました。」

(宮川)「キリスト教との出会いを教えてください」

学長「私の父と母は元々クリスチャンでした。名前もそうなんですけれど、名前もルツ記から取っているのと同じように、生まれた時からキリスト教とともにあって、朝昼晩お祈りからご飯を食べて、日曜学校に行く、幼稚園もキリスト教の学校ということだったので、出会いというよりは、生まれた時から側にあったというものだと思います。」

(程)「いつ洗礼を受けてクリスチャンになられたのでしょうか？」

学長「いろいろな教派の教会を行きました。そのような中で、自分の中で一番じっくりするところで洗礼を受けたいということで、幼稚園の頃から一番長く通っていたバプテスト教会で洗礼を受けることになりました。洗礼を受けたのは2017年になります。妹が2016年に受けて、私も立ち会って姉妹揃って洗礼を受けたということになります。」

（堀川）大学のチャペルへの思いはありますか？

学長「チャペルというのは、神様の声を聞いて、その言葉を自分のものとしてまわりに届けていくところです。人というのは若い時に思い悩んだり、思い患うことがたくさんあるかと思います。その中で、ひとつの聖書の言葉が自分を支えてくれたり、そして聞いたメッセージが何かのきっかけになってくれればいいなと思っているので、たとえばオルガンの音を聞いて眠たいって思ったとしても、その時間が将来にわたって皆さんの心の中に癒しとしてずっとあればいいなと思っています。『何々しなければならぬ』、というのが結構キリスト教系の家族に多いことがあるんですね。『あなたはこうしなければならぬ』『こうすべきだ』という規律的なことが、昔のキリスト教にはあったんですけども、私はそうは思わずに、皆さんの心と共に側にいてくださる、その機会がチャペルだと思っているので、是非1年生の間にキリスト教のことをどういうふうに学べるか、どういうふうに自分の道標としてそれが自分の心の中に培って行ければいいなというのがチャペルへの思いです。」

（宮川）静岡英和学院大学の建学の精神についてお話してください。

学長「皆さんもストレスを抱えたり、不安であったり、そういう悩まれることがあるかと思います。その時には神様に祈りつつ友人や親、教職員に助けを求めてくださいっていうのは、常日頃伝えていることです。だから先ほどにもありましたけれども、神は絶対に見捨てません、大学もあなたたちを見捨てません。反対に皆さんが周りに悩んでいたり困っていたり、助けを求めている友人がいれば、声を掛けて気遣ってほしい、それが『心を尽くして、精神を尽くして、力を尽くして、思いを尽くして、隣人を自分のように愛して、友人や親類、家族を気遣って、まわりの地域の人を気遣ってあげてください』というのが、私なりの見解です。」

（程）キリスト教に関する行事をどのようにお考えでしょうか？

学長「皆さんリトリートを経験されて解ったかと思うんですけども、最初に皆さんが触れる行事っていうのは、入学式そしてリトリートという形になります。アンケートの答えの中で、何が良かったかということ、リトリートの中でこれが良かったという何だったと思いますか？（程）友達が作りやすかったと考えています。（堀川）キャンドルサービスで、隣の人に回していくということで、隣人愛を感じました。（宮川）先輩たちの話を聴けたのは良かったと思います。それが私たちが考えているキリスト教の行事ですね。他の大学だと皆で何かを一緒にすることって、なかなかないと思うんですけども、先輩や教職員の皆さんと一緒に、寝食ともにして、キャンドルサービス、ひとつの炎から分けていった、それはクリスマス礼拝でも一緒に、そういう一つのことからたくさんの人に伝えていく愛とかを経験し、体現していただけるものが行事だと思います。単なる言葉だけではなくて、実際に皆さんが経験し体現する、子育てでもそうなんです、言葉だけではなく、実際に体現することは重要だと言われています。なので、我々の宗教行事っていうのは、実際に経験して、体現する。聖餐式っていうのがあるんですけど、パンを食べぶどうジュースを飲むんですけど、あれは神様の肉と血を自分のものとして一体化する、それと同じように自分も経験することがキリスト教行事だと思っています。」

（堀川）学長から、これからの大学へ、学生へのメッセージをお願いいたします。

学長「本当に明日何があるかわからない、というのが現在の情勢かと思います。1月1日正月に誰かが地震が来ると思ったか。感染症もありました。いろんな水害、火災とかあります。私の仲の良かった高校生の頃の友人が、『明日遊びに行こうね』とっていて交通事故で亡くなりました。また、自分も病気をして体の一部を切除しました。いつなんどき、病気、災害、事故があるかもしれません。何があるか分かりません。だからこそ皆さんには、一日一日を大切に過ごしてほしいと思って

います。皆さんは生かされているということが本当に神様からのメッセージで、生かされていること、それには必ず意味があります。皆さんが生きていることが、この後誰かのために役立って、誰かのために伝わっていくので、是非皆さんにはこのキリスト教系の大学で、入ったこと、学んだこと、生かされていることを大切に思って勉学に励んでほしいと思っています。

※ここに記載した以外の話も、いろいろと学長から伺うことが出来、本当に和やかな雰囲気の中、恵みに満ちた時間を過ごすことができました。感謝いたします。



2024年度 チャペルとキリスト教行事		
3月	卒業礼拝：関川泰寛先生「あなたがたは地の塩、世の光」（12日 10時半～） 教職員全体会：関川泰寛先生「キリスト教教育の労苦と喜び」（同日 13時～14時半） W301	
4月	礼拝（毎週水曜日）	讃美歌
	始業礼拝：永山ルツ子学長「隣人を自分のように愛しなさい」（10日）	Ⅱ 188
	イースター礼拝：柴田敏院長「私の軛は負いやすく、私の荷は軽い」（17日）	Ⅱ 188
	スチューデント・リトリート（清泉寮一泊、富士急ハイランド）大学・短大合同14～15日） 佐々木謙一「いつの時代でも通用するもの」（24日）	312
5月	学生礼拝：「静岡英和学院大学での学校生活の始め」人間社会学部 程一寒(1日)	352
	母の日礼拝：永山ルツ子学長「母の愛、神の愛」（8日）	Ⅱ 147
	ペンテコステ礼拝：柴田敏院長「男も女もありません」（15日）	312
	佐々木謙一「人の思いを超える神の力」（22日）	502
	佐々木謙一「気がつくこと」（29日）	352
6月	永山ルツ子学長「わたしが見るところは心である」（5日）	453
	柴田敏院長「すべての人と平和に過ごしなさい」（12日）	Ⅱ 1
	疋野愛子牧師「働く神」（19日）	217
	金承子先生「長く暗いトンネルのともしび〜聖書とわたし」（26日）	338
7月	柴田敏院長「労苦の内に幸せを見いだす」（3日）	453
	佐々木謙一「自分自身を見つめること」（10日）	461
	終業礼拝：永山ルツ子学長「求める者は受け探す者は見つけたたく者には開かれる」（17日）	405
8月		
9月	始業礼拝：永山ルツ子学長 「WWJD: What Would Jesus Do? イエス様ならこんな時どうされるだろう？」（25日）	Ⅱ 188
10月	柴田敏院長「隣人を自分のように愛しなさい」（2日）	298
	佐々木謙一「自分自身が幸せになる」（9日）	354
	山田美代子先生「主はすぐ近くにおられます」（16日）	461
	佐々木謙一「キリストにはできないことは何もない」（23日）	496
	宗教改革礼拝：松田伸牧師「アブラハムのアーメン」（30日） 第10回クリスマスカードコンテスト（応募期間：1～31日）	267
11月	永山ルツ子学長「秋の実り、収穫に感謝しよう」（6日）	66
	柴田敏院長「私につながっていないさい」（13日）	391
	創立記念礼拝：佐々木謙一「たいせつなタレント」（20日） 大木麻里先生によるチャペルコンサート	Ⅱ 188
	学生礼拝：荒戸ゆういち「1年生でもできる就活」（27日）	
	クリスマス・イルミネーション点灯（12月1日～）	121
12月	柴田敏院長「空の鳥を見なさい」（4日）	111
	永山ルツ子学長「私はあなたを見捨てない」（11日）	98
	Xmas礼拝：佐々木謙一「神様からのプレゼント」（18日） 聖歌隊による合唱（讃美歌106番「あらのはてに」） 学生企画部によるパフォーマンス（岩崎彩佳・程一寒・堀川幸喜・宮川大和）	
1月	新年礼拝：柴田敏院長「業を主に委ねよ」（8日）	73
	終業礼拝：永山ルツ子学長「悩みすぎないー思い煩いからの解放」（15日）	Ⅱ 167

—卒業礼拝説教者 関川泰寛先生を囲んで—



《関川泰寛先生の紹介》

日本基督教学会理事・大森めぐみ教会主任牧師・元東京神学大学教授。
慶応大学経済学部卒。エディンバラ大学を経て、東京神学大学大学院を修了。東北学院大学助教授、東京女子大学講師、国際基督教大学講師、東京神学大学教授、泉高森教会牧師、十貫坂教会牧師を経て、2013 年より大森めぐみ教会の主任牧師、めぐみ幼稚園の園長として現職。

大学開学以来、毎年、大学教育に携わっておられる先生を卒業礼拝講師にお招きし、午前に続く午後のひと時、教職員研修会を実施して参りましたが、今年度は、日本基督教団大森めぐみ教会主任牧師関川泰寛先生に「キリスト教教育の労苦と喜び」と題して、お話していただくことになりました。

その後、先生を囲んで自由に討議したいと思います。

是非、ご出席ただたくよろしくお願いいたします。

日時 2024 年 3 月 12 日（火）午後 1:00 ～ 2:30

1 部	講師による発題	午後	1:00 ～ 2:00
2 部	自由討論	〃	2:00 ～ 2:30

場所 W301 教室

担当 佐々木謙一 宗教主任

「キリスト教教育の労苦と喜び」

2024年3月12日 関 川 泰 寛

1 キリスト教大学とは

キリスト教大学は、公教育の担い手であるとともに、寄附行為においてキリスト教教育の理念を明確にして、それを実践する大学です。礼拝、キリスト教概論は、キリスト教教育の理念と実践に関わるので、キリスト教大学の中心となる構成要素です。

キリスト教大学における礼拝は、御言葉の説教に基づいて、三位一体の神を讃美頌栄する性格を持つ限り、公同的な教会の礼拝と不可分ですが、教会の礼拝とは異なって、大学が主宰する学校行事です。その意味で法人や教学の責任者、教職員の礼拝参加が中心となり、大学全体が礼拝の実施や整頓に責任を負っています。

大学礼拝の主宰者は、礼拝の実践を委ねる組織を学校内に形成し、信頼できる関係を築くことが求められます。さらに円滑で整頓された礼拝を捧げるためには、事務職員や他教員の協力と理解が不可欠です。礼拝のための一定時間を学校全体が確保するためには、大学全体が礼拝を大切にする姿勢を保つことです。

大学における礼拝は、建学の精神やアイデンティティを確認する機会でもありますから、その内容は、聖書の講解を中心にして、多岐にわたって良いと思います。19世紀のジョン・ヘンリー・ニューマンは、「[大学における]説教者は、聴衆が大学人であるということから、教父を引用したり、博識を披露したり、何か独創的な議論を組み立てる必要はないのである。あるいは、様式に凝ったり、装飾をちりばめたりする必要もない。説教者は、自分の前の聴衆の性格と必要を十分に考慮し、聴衆をつまづかせたり、誤解させたり、失望させたり、益を与えそこなったりするものを避けることが必要なのである」(John Henry Newman, 'University Preaching', The Works of Cardinal Newman, The Idea of A University, p. 420f)と述べています。この言葉は、現代の私たちの大学礼拝にもあてはまるでしょう。

2 キリスト教概論

キリスト教概論は、大学のカリキュラムの一部として、大学教育の本質を構成します。そのために、必修単位が割り当てられ、専任の教員が配置され、他の諸学、諸教科との連携、結びつきが模索されます。

キリスト教概論が、他の諸学科とどのように結びつき、それがキリスト教大学全体のアイデンティティになっているかは、21世紀のキリスト教大学にとってますます重要になるでしょう。複雑化し多元化する社会では、キリスト教概論が、他の教科とどのように関係しているかを説明し弁証する必然性も高まるでしょう。この必然性を理解するのは、単に科目の担当者だけではなく、キリスト教概論を設置している大学全体です。先のニューマンは、「キリスト教と医学」という講義の中で興味深い例話を紹介して、キリスト教と諸学の関係を次のように説明しています。

「ある地域に熱病が発生したと考えてごらん下さい。その地域の患者たちを訪れようとしているある修道女に、医者はいいました。『もしいつまでもその地に滞在し続けると、あなたは間違い無く熱病が伝染して死んでしまいますよ』。これに対して、その修道女の上長は、正反対に次のように言いました。『あなたは、その地に留まって奉仕に身を捧げなさい。そのためにもしも

地にとどまれねばなりませんよ』。彼女がその地に滞在し、そこで死んだと考えてごらん下さい。医者の言ったことは、確かに正しかったことになります。しかし、この修道女が間違っていたと、いったい誰が言うことができるのでしょうか。彼女は、医者言葉を疑うことはなかったが、修道会の上長の言葉と比べたときに、その医者言葉の重要性を否定したのです。医者は正しかったのです。しかし、かれは、目的を達成することはできませんでした。かれは、自分が語ったことにおいては、正しかったのです。かれは、真なることを言ったのですが、諦めなければなりません で し た 」（John Henry Newman, 'Christianity and Medical Science', The Works of Cardinal Newman, The Idea of A University, p. 509）。

ニューマンが語るような状況が、現代のわたしたちをも取り巻いているのではないのでしょうか。パンデミック、戦争、AI、生命科学や医療倫理の諸課題などは、諸学と基督教の価値観あるいは人間観の狭間にあります。基督教教育は、医者と修道女の生き方の二者択一の選択を学生に迫ることではないでしょう。重要なのは、ある出来事に関与する人間には、選択が必要であることと、その選択肢には多様性があること、しかもその多様性は、諸科学の発展によってますます増大しつつあることを知らせることであると思います。そして、言うまでも無く、最良の選択は、修道女が生命を失うことなく、伝染病地域の医療に取り組む、新しい可能性を模索する道の探究へと学生、生徒を誘うことです。

公教育の担い手としての基督教大学における基督教概論は、基督教を建学の精神に掲げている限りは、大学全体のカリキュラムの中に位置付けられねばならないのです。さらに、他教科との関係も、カリキュラムやシラバス上に反映されねばならないでしょう。

3 基督教大学にとっての建学の精神

基督教大学の建学の精神は、学校発足の理念と目標を示すもので、形骸化してはならない大学の共有財産です。静岡英和学院大学の前身となる「静岡女学校」は、1887年（明治20年）、カナダの女性宣教師と日本人の有志の協力によって設立されたとうかがいました。1880年代は、基督教ブームが去りつつある時代で、明治憲法の発布、日清戦争の勃発などに至る日本の国粋化が始まります。

静岡の地に、人間性、国際性、専門性を柱とした新しい時代の教育を理想に掲げ、困難な時代に学校形成に船出した先達のスピリットを受け継ぎたいものです。建学の精神は、時代によって形骸化し、大学の柱となる基督教そのものも忘れ去られていくことは、どの大学でも起こりうることです。

このような建学の精神の形骸化を防ぎ、常に理念を新たに自覚して教育を前進させるのは、ひとえに教師の志と力にあると思います。教育の担い手は、いつの時代も人です。どのような組織を作っても成し遂げられなかった教育は、一人の教育者の熱意と力量によって展開され、共有されるものとなることもあります。建学の精神の担い手は、クリスチャンだけに限られません。同じ mission を共有する大学の構成員すべてが、教育活動における学生との対話を通して、建学の精神の担い手となりうるのです。

静岡英和学院大学の教育の基本精神が、一貫して「愛と奉仕」であるなら、全学生、全教職員がこれを共有し、教育の与え手も受け手も、それを自覚することが大切だと思います。基督教の建学の精神は、ただ一時代のスローガンとしてではなく、基督教信仰の奥深さとそれが文化へと与えた影響の広さと深さが結実した言葉として、大学の共同体のメンバーが共有するところから始まります。基督教大学に奉職しながら、たとえ基督教信仰を持っていなくても。あるいは基督教には懐疑的であったとしても、一つの宗教の凌駕し難い、広がりと普遍性には気づく必要はあるでしょう。もし基督教という宗教の名を、身近にあるカルト宗教の名前や、本屋で

手にする新書版の一冊の内容に還元できると勘違いしているのなら、それはキリスト教大学に勤める意義を大いに薄めるものとなることでしょう。

「愛と奉仕」という基本精神は、お題目ではなくて、在学生と卒業生が、社会に出て、数十年の社会活動を行う中で発揮されるものです。職場や家庭、自分が属する共同体の中で、隣人を愛するという生き方を貫く卒業生がいたならば、さらには愛と奉仕という観点から、自分の果たすべき責任や自分の主張、人生観を築く卒業生がいたならば、大学のキリスト教教育は、実を結んだことになります。その成果をすべて追跡することはできません。しかし、神のみが知る教育の成果があることを私たちは知るべきです。

4 アウグスティヌスの生涯から学ぶキリスト教と教育

さて、ここで少し角度を変えて、4～5世紀の古代末期に生きたアウグスティヌス（354-430）の生涯をたどりながら、キリスト教とはそもそものような宗教なのかをお話したいと思います。キリスト教という宗教は、今から二千年前に現在のイスラエルに生きたイエスという人物を「キリスト（救い主）」と宣べ伝える過程で、多様な文化と接触し、ある時には文化を摂取し、またある時には文化と対決しながら、新しい文化創造を行ってきました。確かにキリスト教には、一部原理主義的な文化否定型の形態が存在します。しかし、これはキリスト教の歴史から見れば、ほんの一部にすぎず、大部分のキリスト教は、文化と折衝して、その成果を遺産として伝達する営みをかなり継続して行ってきました。加えて、国家と結び付き、社会体制の形成に参与してきました。その中に、教育、大学教育の営みも含まれます。中世のキリスト教の歴史の中から大学が誕生したことも事実です。

アウグスティヌスの生涯の舞台となったのは、古代末期の北アフリカ、そしてローマ、ミラノというイタリアの都市でした。キリスト教徒モニカを母とし異教徒パトリキウスを父として、354年北アフリカの町タガステ（現在のアルジェリアのスーク・アハラス）で生まれたアウグスティヌスは、教師から鞭の罰を受けるような幼少期を過ごしました。彼の家庭が必ずしも裕福ではなかったことは、学資を知人から援助してもらったという事実からうかがうことができます。やがて隣町マダウラの中等学校で、ラテン語の文法と修辞学を学びます。偉大な古典によって記憶力を鍛えたアウグスティヌスは、のちに聖書もまた暗記したものと思われます。彼の聖書からの引用は、6万にのぼると言われます。さらに、声に出して古典を読み、それがアウグスティヌスの演説の技法の修得と結びつきます。

16歳で、カルタゴに遊学します。「愛し愛されるカルタゴ」という欲望がアウグスティヌスをやがてとらえます。「煮えたぎる大釜（サルタゴ）」と言われた歓楽の港町の享楽的生活の虜になります。やがて、一人の女性（名前は明らかにされていません）と同棲し、アデオダトスという男の子が生まれます。アウグスティヌスが18歳の時です。このとき、アウグスティヌスの真理探究の旅も同時に始まっていました。キケロの『ホルテンシウス』を読み、愛知の精神で存在を満たしました。しかし、アウグスティヌスの人生は、すでに家族を養い、一児の父としての責任をも逃れることはできない状況にありました。

この頃、アウグスティヌスは、当時ローマ社会に入ってきて、急速に若者たちの心を捉えていた一種の新興宗教であったマニ教に入信します。マニ教は、ペルシア起源の宗教で、善と悪の二元論を原理として、すべてを両者の対立から合理的に説明します。約10年間アウグスティヌスは、マニ教を信奉し、同時にその伝道に熱心に努めました。しかし、やがて、当時のマニ教の指導者フェウストスに実際に会おうことによって、この宗教に対する懐疑が芽生えてきます。同時に、マニ教からアウグスティヌスを引き離し、何とかしてキリスト教に連れ戻したいと願う母モニカの情熱も忘れることはできません。

やがて、アウグスティヌスは母モニカの説得を振り切って、カルタゴの港から船に乗って、ロー

マに向かいます。アウグスティヌスは、ローマで当時最先端のヘレニズム哲学の一つ「新アカデミア派の哲学」を知ります。この哲学は、懐疑論的な立場を主張するもので、結局人間には真なるものの探究は不可能であるという結論を下しました。アウグスティヌスは、一時的にはこの哲学に共感を覚えますが、若き日に真理探究の旅に出立したわけですから、その結論に満足したはずはありませんでした。

その後、ローマ市長シンマクスの推薦もあって、アウグスティヌスはミラノの国立学校の修辞学教授に迎えられることになります。それまで、家庭教師をしたり、塾の講師をしたりしながら、有名になることをひたすら目指して、日々を過ごしていたアウグスティヌスが、はじめて手にする名誉ある地位ということになりました。

ミラノに赴いたアウグスティヌスは、385年当時のローマ皇帝ヴァレンティニアヌス2世のために、皇帝を讃える頌詩の朗読という荣誉ある役割を与えられます。名誉ある役割を与えられ、幸福の絶頂になっていたアウグスティヌスは、一人の酔いどれ男に道端で出会います。その時、アウグスティヌスは、自分自身が感じている幸福とこの酔いどれ男の幸福とといったどこが違うのかという問いが湧き上がってきました。問いは、アウグスティヌス自身の幸福を相対的なものにしていきます。ここで、注目すべきは、アウグスティヌスという人物の問いは、常に、真理とは何か、至福とは何かという普遍的な実在への問いであったということです。このような問いは、ギリシア哲学者たちもまた問い続けたものです。アウグスティヌスは、そのようなギリシア哲学者の問いを自分のものとして探究しつつ、彼がその問いに導かれて出会ったのは、聖書の言葉であったということです。

ミラノのアウグスティヌスにとって、生涯を転換させる大きな出来事が起こります。それは、第一に、新プラトン派の哲学の書物との出会いでした。その書物は、プロティノスの書いた『エネアデス』と思われます。新プラトン主義は、真・善・美のイデア界の最高存在として、一者なる神の存在を想定しました。人間の魂は、イデア界から下降する最高存在と神秘的に合一することによって、救済へと至ると教えました。アウグスティヌスは、新プラトン主義との接触によって、はじめて懐疑主義や新興宗教の合理性から抜け出して、超越的な世界へと目を開いていきます。新プラトン主義はキリスト教の世界観や神観と共通する思想の枠を持つゆえに、アウグスティヌスをして、キリスト教の世界に接近させるきっかけになったのです。

さらに、アウグスティヌスは、ミラノで、司教アンブロシウスの説教を聴く機会を得ます。それまで、貧弱な宗教、聴くべきものは何もないと考えていたキリスト教と聖書の中に、実に豊かで、知的な伝統が存在することを肌で感じたのです。

ミラノ司教アンブロシウスの多大な感化によって、アウグスティヌスはキリスト教へと誘われていきます。新プラトン主義、アンブロシウスとの出会いは、偶然というよりも、摂理的にアウグスティヌスの生涯を決することになります。ミラノのある家の中庭で、何気なく子供たちのわらべ歌を聴いていたアウグスティヌスの耳に、「取りて、読め」（トーレ・レーゲ）という歌声が飛び込んできます。突然、アウグスティヌスの心には、「聖書を開いて、読みなさい」という神の声が鳴り響きます。アウグスティヌスが、最初に聖書を開いて、確認した聖句こそ、ローマの信徒への手紙13章13節の御言葉でした。「日中を歩むように、品位をもって歩もうではありませんか。酒宴と酩酊、淫乱と好色、争いとねたみを捨て、主イエス・キリストを身にまといなさい。欲望を満足させようとして、肉に心を用いてはなりません」。この聖書の言葉によって、アウグスティヌスは回心します。長い思想遍歴は、キリスト教との出会いとキリストにおける神の自己啓示の確信へと結実していきます。

やがてアウグスティヌスは、キリスト教の洗礼を受け、イタリアを去って、北アフリカに戻ります。ヒッポという町の司祭そして司教となって生涯を捧げます。ヒッポの司教時代に、数多くの著作を行い、古代末期から中世のスコラ学、そして16世紀に宗教改革者たちの思想形成に大きな影

響を与えることになります。『告白』（『アウグスティヌス著作集5』教文館所収）『神の国』（『アウグスティヌス著作集11～15』）『教師』（『アウグスティヌス著作集2』）『秩序論』（『アウグスティヌス著作集1巻』）などが代表的な著作です。

アウグスティヌスは、『告白』において、自分の生涯を振り返りながら、自分自身の中で、キリスト教信仰がどのように受け止められるようになったかを省察しています。西欧キリスト教文化が、省察の文化となったのは、アウグスティヌスの功績によるとしばしばいわれます。実際『告白』の冒頭部分には、「わたしの魂は汝のうちに憩うまでは安らぎを得ません」という有名な言葉が出てきます。「わたし」自身の存立の根拠と意義は、「私」と「永遠の汝」との関係の中で考察され始めています。キリスト教教育は、アウグスティヌス以来、私と他者、私と絶対他者との関係性の中で探索されていきます。アウグスティヌスの思想には、新プラトン主義の痕跡が残りますが、その後中世のスコラ学の実在論的な立場、宗教改革者の思想などに継承されて、キリスト教思想の根幹を形作ります。ヘレニズム文化と聖書の思想ヘブライズムの文化の融合だとも評されますが、細部を学ぶと現代の諸思想へと展開する思想の宝庫がそこにあることがわかります。

5 キリスト教教育の労苦と喜び

日本におけるキリスト教教育の労苦は、キリスト教が常にマイノリティー宗教であるという事実から起こる場合が少なくありません。明治期のプロテスタント伝道と学校の設立は、キリスト教禁令の時代が終わり、宣教師たちの伝道が許されて、異国の文化の受容への熱意がキリスト教ブームを巻き起こすものの、日本の国粋化が進むとそのブームが去るというような、実用主義と結びついたキリスト教が浮沈を経験する時代に始まります。先に述べたキリスト教教育においても、英語や実学と結び付くキリスト教への関心は起こるものの、キリスト教信仰の深さや普遍性などは理解されず、キリスト教学校の建学の精神や理念は偏狭な信念体系にすぎないと誤解されてきたことも事実です。

しかし、キリスト教教育の「労苦」は、苦勞とは違います。初期の宣教師たちは、苦勞をものともせず、「労苦」を背負いました。キリスト教を邪教として排斥してきた土地に果敢な伝道を行いました。それは、単に植民地拡大の野望のようなものではなくて、神の御子イエス・キリストが、労苦を負ったという信仰の確信があったからだと思います。キリストの労苦とは、人々の罪に代わって、御自分が犠牲となる労苦です。このような宣教師たち、そしてキリスト教学校の創設者たちの労苦を想像して自分のものとしてできるかが、これからのキリスト教学校の在り方に関わってくるのではないのでしょうか。

キリスト教教育の「喜び」とは、喜ぶことができない状況の中でも喜ぶという逆説的な意味合いをもっています。牢獄に捕らえられていた使徒パウロは、フィリピの信徒への手紙4章4節で、「主において常に喜びなさい」と書き送りました。とても喜べる状況の中にはいない信仰者が、それでもなお喜ぶのは、苦難の中にあって、苦難は終わりではなく、忍耐を生み、忍耐は練達を、練達は希望を生むと信じていたからです（ローマの信徒への手紙5章3節）。なぜ、苦難の中にあっても喜ぶか、それは苦難の中にいればいるほど、その人がキリストにあって、キリストと共に生きるようになるからです。

キリスト教の核心には、キリストと結ばれて生きようになる宗教経験が存在します。キリスト教学校の創立者たちは、そのような確信と経験によって、教育を始めています。先にご紹介した、アウグスティヌスがミラノで聞いた「取りて、読め」という歌声に促されて開いた聖書の言葉が回心をもたらしたのと同じです。回心経験とは、人生の180度の転換です。自分を主人とする生き方から、キリストを主とする生き方に変わることです。

先日、NHKのEテレで渡辺和子（1927～2016）さんのインタビュー番組が放映されていました。渡辺和子さんは、8年間にお亡くなりになりましたが、今でも、その著作を通して、多

くの読者を得ていると思います。彼女は、9歳の時に、2・26事件に遭遇し、陸軍の教育総監であった父渡辺錠太郎の死を目撃します。1936年の2月26日 陸軍のクーデターが起こり、決起した将校たちが自宅に押し入り、渡辺錠太郎氏を暗殺します。機関銃で銃殺され、銃剣で突かれて父はその場でなくなりました。この事件後に、渡辺和子さんは、中学、高校、大学に進学し、カトリックの洗礼を受け、上智大学に勤めているときに、一人の神父の影響で修道女となる決意をします。その後、アメリカのボストンに留学して博士号をとり、30代半ばで岡山にあるノートルダム清心女子大学の学長になります。NHKの番組は、父を殺害した将校の弟さんと渡辺和子さんのその後の交流を描いたものでした。番組の中で、大学の正門に掲げられた詩が朗読されていました。その詩は、岡山の牧師であった河野進さんの次のような詩です。詩というより祈りの言葉というべきかもしれません。「天の父さま、どんな不幸を吸っても はく息は感謝でありますように。すべては恵みの呼吸ですから」

この短い言葉の中に、キリスト教の喜びがどういうものであるかが示されています。キリスト教の喜びは、どれほどの試練や不幸が襲ってきても、失われることのない喜びであり感謝です。アウシュビッツから生還したヴィクトール・フランクルの言葉を用いれば、「それでも人生に然りと言う」ということになるでしょうか。

キリスト教教育には、多様な側面があります。短い時間で語りつくせるものではありませんが、今日の私の拙い話からぜひ聴き取っていただきたいことは、私が単なるキリスト教の教えの正当性や有意味性を弁証しているのではないということです。キリスト教が伝えてきた真実の信仰は、自分自身がコミットすることによって、はじめてその世界が開けてくるスリリングな世界です。アウグスティヌスが、キケロ、マニ教、ヘレニズム哲学、新プラトン主義と遍歴し、最後にキリスト教の聖書から、回心経験をしたように、そのような経験から、キリスト教信仰の奥深さを体験することができます。アウグスティヌスの思想は、そこから展開された神学であり哲学です。キリスト教教育の労苦と喜びとは、そのような根源的ともいえる人間の経験と接触します。そこから、ルターやカルヴァンの神学思想を知ることができますし、パスカルの思想、バッハの音楽、宗教音楽と宗教画の世界、それを携えて海を越えて、日本に伝道しようとした宣教師たちのスピリットを理解することができます。そしてそのような精神を破壊し、支配する悪と接する思想との対決にまでキリスト教は関与します。もちろん、時にキリスト教を伝える教会自体が、責めと責任を負わねばなりません。そういう覚悟も与えられながら、キリスト教教育の労苦と喜びは続くのです。確かにアウグスティヌスが語るように、「わたしの魂は汝のうちに憩うまでは安らぎを得ません」。

私は、昨年の夏に、アウシュビッツ（ポーランド語でオシフィエンチム）を訪問する機会がありました。ポーランドのクラクフからバスで1時間ほどのところですが。第二次大戦中に、ナチスの迫害によって、600万人のユダヤ人、ロマ人、政治犯などが殺害されました。アウシュビッツでは、110万人の人々が殺害されたと言われています。クラクフのバスターミナルからアウシュビッツ行のバスが出ています。収容所後が近づくと、深い森の中に入ります。乗客たちは、押し黙ったままでも何か沈鬱な空気が支配します。

「労働はあなたたちを自由にする」という当時のままの門のバリアーを超えて、収容所の広大な敷地と建物に入ります。ここには、ポーランド、ハンガリーなどヨーロッパの各地から家畜を運ぶ列車に乗せられて、ユダヤ人たちが運ばれてきました。何百年もの間、チェコ、ハンガリー、ポーランドなど、都市でも農村でも共存していたはずなのに、ユダヤ人は迫害の対象となりました。一夜にして、彼らは平和を失いました。エリ・ヴィーゼルの『夜』という書物の中で、自分が長く生活してきたハンガリーのシゲトという小さな村にまで、迫害の手が及ぶなどとは到底考えられなかったと書いています。

誰一人、抵抗することもできず、差別と暴力の犠牲となり、ヨーロッパ各地の収容所で600万人が死んでいきました。キリストとともに生き続けた人々の中に、最後まで平和を創り出すために生

きた稀有な人々もいました。アウシュビッツの建物の地下に、今も飢餓牢の跡が残っています。そこにコルベ神父（1894～1941）の独房跡があります。コルベ神父は、日本でも伝道したポーランドの修道士ですが、ナチスに批判的な文書を書いた嫌疑で逮捕され、アウシュビッツに収容されました。1941年のある日、収容所で一人の脱走者がありました。脱走者があると、10名が身代わりに飢餓牢に入れられることになっていました。飢餓牢では、立ったままで、水も食料も与えられず、苦しみの末に確実に人々は殺されました。無作為に選ばれた10名の中に、フランツェク・ガイオニチュクというポーランド人の男性がいました。彼は、自分には家族がいると命乞いをしたのです。するとコルベ神父が、身代わりになることを申し出ました。この出来事は、ガイオニチュクが生き延びて、戦後全ての出来事を語り伝えたために、人々に知られるようになりました。今もコルベ神父が死んだ飢餓牢には、教皇がささげた一本のロウソクが立てられています。コルベ神父が示したものは、キリストにあって生きる人の勇気であり命です。

ナチスの蛮行を行った多くのドイツ人たちは、洗礼を受けたクリスチャンでした。問題は、形だけのキリスト教では私たちは生きることはできないということです。いやむしろ害毒を垂れ流すこともあるのです。コルベ神父も、さらにまたナチスへの抵抗を貫いたベルリン大学の神学教授ボンヘッファー（1906～1945）も、パウロのように、生けるキリストに出会い、キリストを仰ぎ、キリストを人生のかなめ石（エフェソの信徒への手紙2章20節）としていたことです。ボンヘッファーは、最後までナチズムに抵抗し、終戦直前にベルリンの刑務所で処刑されました。

このような労苦は、キリストが苦難の末に十字架で死んで、私たちに代わってすべての重荷、負債、罪を代わって負ってくださったという確信によって、彼らの決断に基づいて引き受けられたものです。キリスト教は、形だけでは真実には生き残りえない宗教です。キリスト教学校も同じだと思います。本日は、最初に形の話をしました。形は大切です。形なしに大学の維持、運営はあり得ません。しかし、形だけでは、真の意味でのキリスト教大学は存続しえないようにも思えます。コルベ神父やボンヘッファーのように、たった一人でも、キリストの名によって、「愛と奉仕」の生活を実践する者がいるところにキリスト教の教育機関の可能性が生まれます。

イエス・キリストが語った福音に「神の国のたとえ」があります。マルコによる福音書4章26節に「神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである」。

教職員、学生、卒業生、誰も知らない小さな「愛と奉仕」のわざは、目を出して豊かな実りを結ばせる。キリスト教学校の労苦と喜びは、この主のたとえにも示されているのではないのでしょうか。

参考文献

- ・アウグスティヌス『告白』（中央公論世界の名著『アウグスティヌス』所収）
- ・渡辺和子『強く、しなやかに 回想』（山陽新聞社）
- ・関川泰寛『キリスト教古代の思想家たち』（ヨベル）
- ・関川泰寛『ここが知りたいキリスト教』（教文館）
- ・マクグラス『キリスト教思想入門』（関川泰寛他訳）（教文館）

『キリスト教研究年報』執筆要綱

1. 本誌は、静岡英和学院大学及び静岡英和学院大学短期大学部に在籍しているキリスト者教員(過去に在籍していた者を含む)の研究年報誌であり、該当教員の研究論文、研究ノート、その他キリスト教関連記事(チャペルなど)を掲載する。
2. 編集委員会は、キリスト者教員である委員長及び教員若干名によって構成する。
3. 委員長は、宗教主任とする。
4. 原稿の掲載は、編集委員会の審議を経て決定する。
5. 執筆者による校正は再校までとし、原則として大きな修正は認めない。

投稿要項

1. 論文原稿は、未発表のものに限る。
2. 原稿について
 - ①原稿は、原則として横書きとし、電子媒体で提出する。
 - ②「研究論文」は、16,000字以内(注・図表等込み)完全原稿とする。
 - ③「研究ノート」は、12,000字以内(注・図表等込み)とする。論文としての完成度は要求しないが、新たな方法論や視点を提供する内容であること。
 - ④原稿は返却しないので、写しをとっておくこと。
 - ⑤使用ソフトは、マイクロソフトワードとし、文字フォントは、原則として和文では明朝体、欧文では Century 体とする。
 - ⑥原稿の文字の大きさ(ポイント)は、10.5ポイントとする。
 - ⑦原稿の用紙設定は、A4・縦置き・横書きとし、余白は、上 32mm、下 30mm、左右ともに 25mm とする。
 - ⑧原稿の字数設定は、1行半角 80 字(全角 40 字)、各ページ 40 行とする。

附則

この要綱は令和7年4月1日から施行する。

編集後記

『キリスト教研究年報』第7号を発行することが出来ましたことを嬉しく思います。今号のテーマは「キリスト教と学び」でした。

今号では、特に「礼拝を通しての学び」という題で、静岡英和学院大学における礼拝について考えてみることにしました。先ず、三名のクリスチャン教員による合作で礼拝についてのアンケートフォームを作成しました。そして、一年生全員（1学部・2学科）にそのアンケートに回答してもらいました。今回は一年生後期のみの結果ですが、次年度はこの調査を継続し、今年度のものと比較検討していこうと考えております。尚、今回は研究ノートとしています。

また、永山学長は静岡英和学院大学1年生、静岡英和学院大学短期大学部1年生を対象にアンケート調査を実施し、それを『キリスト教系大学における大学生の「宗教性」の意識と「共感性」に関する検討』という論文にまとめられました。

そして、柴田院長は静岡英和学院大学短期大学部現代コミュニケーション学科の選択必修科目の担当授業の中で、アンケート調査を実施し、それを『授業科目「コミュニケーション力」の実践報告』という論文にまとめられました。

金承子先生は、聖書が示すポジティブ思考が現代の自己啓発に与えた影響を考察し、それを『キリストの教えに学ぶポジティブ思考と自己成長』という論文にまとめられました。

次に、キリスト教の「悪魔」を研究してきました私は、新約聖書におけるキリスト教の「悪魔」について研究し、『新約聖書における「悪魔」についての一考察』を執筆しました。

さて、今回は特に、2022年9月より学長になられた永山ルツ子先生に「永山ルツ子学長の思い」と題して、インタビューをさせていただきました。貴重な話を伺うことが出来ましたが、その中でも、学長が建学の精神の具現化できる場所が礼拝であり、礼拝は本当に大切なものであると語られていることが印象的でした。さらに、永山学長とキリスト教との出会いの場が幼少期からであったことをうかがい、驚き、また神様の御業の素晴らしいことを思い、感動しました。

静岡英和学院は今年138周年、短大59周年、大学は23周年となりますが、これまでの歩みとそして、これからの歩みの上に、神様の祝福が豊かにありますようにと祈り筆をおきたいと思います。

尚、2024年3月12日に行われた教職員研修の際、配布された関川泰寛先生のレジュメと2024年度の静岡英和学院大学における宗教活動報告を掲載しました。

最後に、『キリスト教年報』第7号に協力して頂いた本学教員、また株式会社篠原印刷所の秋田氏に心から感謝いたします。

《宗教主任 佐々木 謙 一》

キリスト教研究年報 第七号
Christianity Study Annual

2025年3月31日印刷

2025年3月31日発行

編 集	「キリスト教研究年報」編集委員会
発 行	静岡英和学院大学キリスト教研究会 静岡市駿河区池田1769番地 電話（054）261－9201
印刷所	株式会社 篠原印刷所 静岡市駿河区登呂6－7－5 電話（054）286－5141

